

秋田県出土の銭貨資料集成

高 橋 学

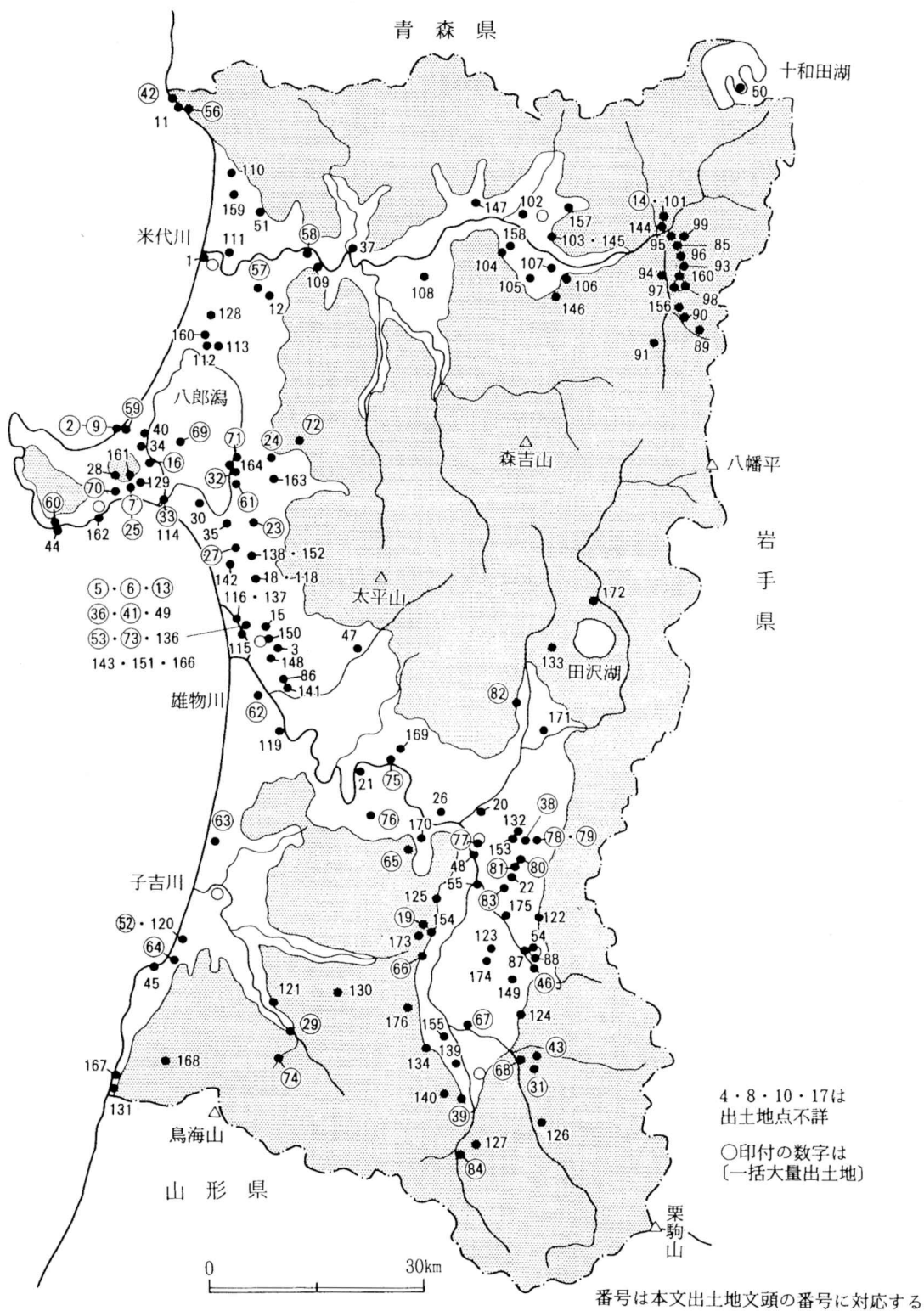
はじめに

土の中からお金が掘り出される、しかも大量になると、否応なく人々の関心を引く。新聞紙上にも「古銭ザクザク・・・」などの見出しで報じられることもある。出土したお金、それはまさに埋蔵文化財である。ところが発掘調査によらない銭貨、例えば一括して大量に出土する銭貨は、工事や耕作等に伴い偶然発見される場合が多く、銭貨自体に目を奪われ、出土状況、収納容器の有無などは等閑視される傾向にある。このことが考古資料としての価値を低減させ、出土銭貨の研究の進展を阻む要因ともなっている。

秋田県内では主に各種開発事業に係る発掘調査が実施されている。特に昭和50年代後半以降、その規模は拡大傾向にある。当然各時代・時期の遺構が検出され、遺物が出土する。その量はまさに膨大の一言である。出土遺物の中には、ごくごく少量の銭貨もある。中世あるいは近世の集落・館跡等を調査すると数枚から数十枚の銭貨が出土する場合がある。そもそも該期の調査において遺物はさほど出土しない。少ない資料から当時の地域・社会を復元しようとする時、出土した銭貨が大きな位置を占めるかもしれない。しかし現実的には銭貨を材料とした論考は、県内においてはほとんど認められない。これには前述の傾向が発掘による出土銭貨にも影響を及ぼしているとも考えられる。そこで小稿では出土銭貨に対する一層の認知と喚起を促す意図を込め、基礎作業としての出土銭貨の集成を行うものである。これには今後予想されるデータベース化を見据え現段階での県内資料を集成しようという側面も含んでいる。

出土銭貨集成

本銭貨集成では、県内出土の事例をその量の多寡及び時代を問わず行う。これには発掘調査で得られた資料、文献史料、工事等で偶然発見された資料も網羅しておく。記述にあたっては、江戸時代から昭和（戦前）については、発見史を兼ねて出土年の古い事例から列べる。昭和（戦後）以降は、出土地（遺跡）の種別・年代や一括出土の有無と量等から次のように項目を定め、県北から順に紹介する。項目は【一括大量出土地】【一括少量出土地】【中世の館跡・集落跡】【中世の墓・塚】【皇朝銭出土地】【近世の館跡・塚・神社跡等】【その他の出土地】とする。【一括大量出土地】は、一般には1,000枚以上の一括出土銭を指すようであるが、ここでは概ね200



第1図 銭貨資料出土位置図

枚以上とし、100枚以上200枚未満の一括出土を仮に【一括少量出土地】として区別させた。一方明確に中世期の館跡・集落跡とは断定できない場所から中国等の渡来銭が少量出土した場合も【中世の館跡・集落跡】に含めて紹介する。また【その他の出土地】は、出土銭貨の種別が不明なもの、寛永通寶等の近世日本銭が遺構外より出土した例を収めている。

以下の記述にあたって、銭名・銭種の掲載配列、初鑄年、その他銭貨に関する用語等については、永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』（1994年発行）に準拠させていただいた。なお出土地文頭の数字は、第1図の出土位置図番号に対応する。出土地の名称は各文献に掲載されている名を表記し、住所は可能な限り現住所（小字まで）を調べ記している。また発掘調査によらない事例の出土地に「遺跡」名が付されている場合は、銭貨出土地等として周知登録されている遺跡であることを示す。

【江戸時代から昭和（戦前）出土の銭貨】

1 大森下浜 能代市大森（文献1）

宇野親貞が寛保元年（1741）に著した『代邑見聞録』によると、「元禄七年（1694）甲戌地震の後・・・大森下浜菅交りの沙地へ折節往来ありて古銭など拾ひたまひける」との記述が見られる。大森下浜は、米代川河口左岸の日本海沿岸の大森、下浜集落にあたることから、おそらく海岸に打ち上げられた銭貨を拾ったことを記録したものと思われる。この記事が県内での出土銭の初例となる。

2 中石浜 男鹿市五里合中石（文献2—①～④）

① 享和元年（1801）に稿了された人見蕉雨の随筆集『黒甜瑣語』^{くくてんまご}（四編卷之二）寺内村の銭の項にはいくつかの出土銭の記録がまとめられている。その中に「宝暦壬申の冬、雄鹿中石村の海岸へ銅銭数万を吹上し事あり。記号みな宋の年号にして、さばかりの異銭にもあらず」とある。宝暦壬申は、宝暦2年（1752）を指す。人見は出土した銭貨を実際に見ていたのかは不明であるが、享和元年に著した紀行文『夏ノ本草』には、「中石むらへ近づき、かの宝暦壬申の冬宋の古銭を網したる浜を尋ね」と中石浜を訪れたことを記している。

② また、鈴木重孝が嘉永年間（1848～54）に著した『絹篩』（卷之三）中石村の項にも、宝暦2年冬の中石浜出土銭を「当浜へ相揚候古銭」と記している。鈴木は銭種の一部も書き残している。それによると淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、嘉祐元寶（あるいは通寶）、治平元寶（あるいは通寶）、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶（あるいは通寶）、元符通寶の16種類の北宋銭名が記されている。その他に「天福と云銭、これは晋の高祖の年号に候へ」とあることから、天福元寶（後晋938年初鑄）も含まれていたようである。

③ 中石浜の出土銭については、菅江真澄の『月の出羽路』（仙北郡八）にも「宝暦壬申の冬、雄鹿中石ノ浜に銅銭数万吹上し事あり」との記載が見られる。これは『黒甜瑣語』からの引用であることを明記している。

④ さらに、石井忠行が明治5年3月に著した『伊頭園茶話』（三の巻）にも同様の記事が見られる。

ここでは、寛政元年（1789）と昭和54年にも多量の出土銭が発見されており、後述する。

3 藤山観音 秋田市榑山（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「其頃（宝暦年間か）榑山藤山の観音祠の辺にても古銭をほり出し」とある。同様の記事は『月の出羽路』（仙北郡八）にも認められる（文献2—③）。

4 番太村 湯沢市須川（文献3）

菅江真澄の『雪の出羽路』（雄勝郡一）須川村の項に古跡として「番太村とて橋より西の方にむかし家居ありし村跡也、そこに近き古河の辺りに、宝暦〔1751～64〕のころ古銭あまた掘得し」との記録が残っている。番太村の地名は現存しないが、旧高松村の小字に番沢がある。

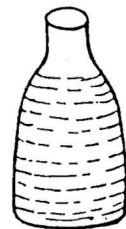
5 雄物川辺 秋田市寺内か（文献4）

昭和22年に編纂された『寺内町誌』には、「明和の初年（1764）に河原御物川の辺で古銭を入れた甕を掘った。何れも世に稀な古代の寶で、甕の中に九ツの内といふ文字があった」とある。

6 高清水付近 秋田市寺内（文献4）

『寺内町誌』には、「明和八年（1771）九月十九日にも、高清水付近で甕に入れた古銭十六貫文余を掘出した。是は何銭であったか記していない」とある。

明和年間の出土銭については、『伊頭園茶話』（三の巻）にも「明和中城北寺内村里人土瓶を掘出す。内に唐銭数百千あり。五朱半両数銭余は宋朝の銭也」記され、壺のスケッチが載せられている（第2図）。図の下には、「高さ二尺許素焼なり」とある。（文献2—④）



第2図
高清水付近
出土の壺

7 豹が崎 男鹿市脇本富永宇大倉（文献5）

狩野徳蔵が著した『雄鹿名勝誌』によると、江戸時代（18世紀後半か）大倉豹が崎において「同村の信五郎といふ者も同処より古銭一萬枚を掘得たりと云う」と記されている。豹が崎では明治8年にも多量の銭貨が出土しており、後述する。

8 舟越 男鹿市船越か（文献2—①）

『黒甜瑣語』奇銭の項には「安永戊戌の春、舟越村へ異船漂着せり。朝鮮国の漁船の類にや、長さ十間ばかり幅八尺余、舟子一人もなく舟中に釜一つ、囊に此常平銭百文余あり、背に半月露痕の点あざやかにして禁文。戸八。管全。当水。摠三。訓十。などの字あり。銭座の標記な

るべし。」と記されている。安永戊戌は、安永7年(1778)である。常平銭は朝鮮1678年初鑄の常平通寶である。本例は漂着船より得られたもののようであり、厳密には出土銭とは言い難いのかもしれない。

9 中石浜 男鹿市五里合中石(文献2—④)

前出の『伊頭園茶話』には、中石浜で再び大量の銭貨が打ち上げられたことを記している。寛政元年(1789)「同村浜に唐銭数万砂中へ吹上る。多くは宋朝己来の物也」とある。

10 豊嶋村 河辺町(文献2—①)

『黒甜瑣語』によると、「寛政のはじめ(1789年頃)に至りては豊嶋村にても一つの銭瓶をほり出せしに、元龜二年(1571)溝口氏久藏之と小の木片に鑿りしはいかなる人にや」とある。同様の記事は、『月の出羽路』(仙北郡八)にも載せられている(文献2—③)。

11 岩館海岸? 八森町岩館(文献6)

佐藤清一郎著『秋田貨幣史』によると、寛政7年(1795)「山本郡岩館村の者海岸で金、銀銭(外国銭)を拾う」とある。人見蕉雨の記録から引用したようであるが、引用原典不詳で筆者未確認である。

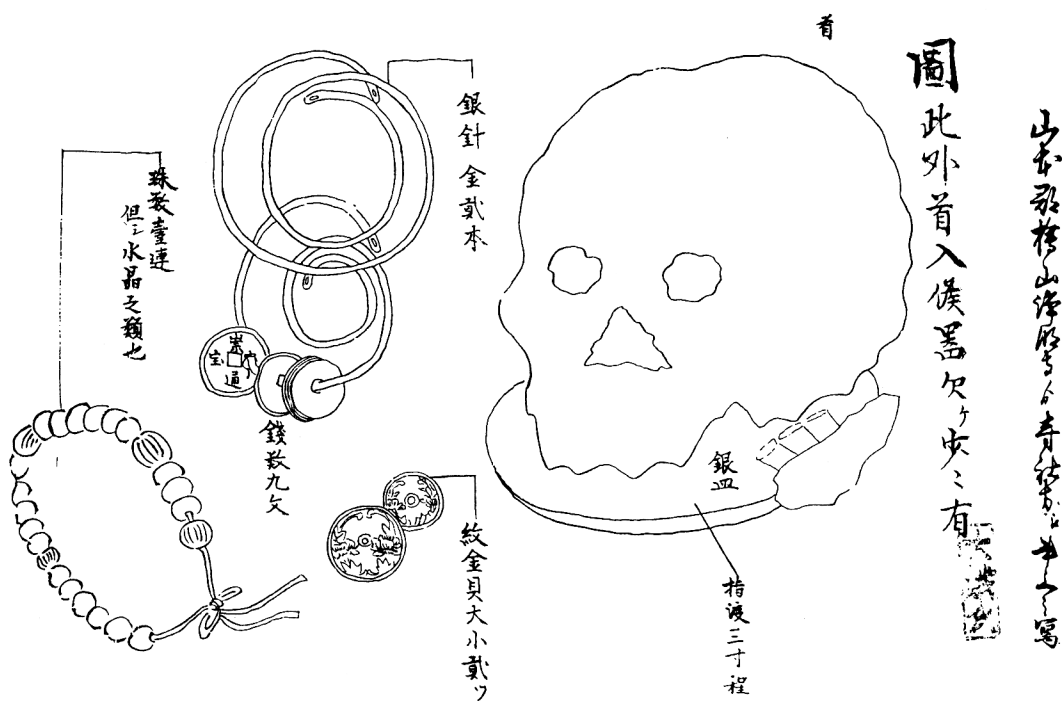
12 浄明寺首塚 能代市檜山(文献7—①②)

① 能代市檜山に所在する浄明寺では、寛政11年(1799)4月4日に裏山の麓にある塚より銭貨等が出土したことを寺社奉行に報告している。これを大越五水という人が弘化2年(1845)に密かに書写しており、後年真崎勇助(1841~1917)が収集した文書の中に『山本郡檜山浄明寺掘出品之書上』として現存する(第3図)。同書には、銀皿に乗せられた頭蓋骨、水晶の数珠、絞金具、銀針に通された9枚の銭貨が図示されている。個々の銭貨も模写されており、開元通寶、乾元重寶、熙寧重寶、元豐通寶、元符通寶、崇寧通寶、宣和通寶、慶元通寶、咸淳元寶各1枚の銭種が判読できる。

② 出土銭の記事は、秋田藩士の淀川盛品が文化12年(1815)に著した『秋田風土記』にも次のように記されている。「庭前より髑髏出、銀の台破れたり。水晶の念珠、輪銀に銀の文字替の銭九文あり。奉りし処又葬るへしとて返し賜るといへり」とあり、出土品は再び塚に埋納されたようである。

13 寺内村 秋田市寺内(文献2—①)

『黒甜瑣語』によると、「さりし庚申閏四月念日、土崎湊の者とや寺内村にて十貫余の古銭を掘得たり。府に献ず。多くは明和のはじめ見し銭のごとく五銖半兩尤も多し。かの九ツの宝甕の中なるべし」とある。庚申は、寛政12年(1800)である。『寺内町誌』にも、同様の記載が見られ、「十貫余の古銭を掘った。いづれも五銖銭(秦—随)半兩(秦—漢)が最も多かった」とある。



第3図 浄明寺首塚出土の遺物と銭貨（大館市立中央図書館蔵）

14 毛馬内古館 鹿角市十和田毛馬内（文献8）

伊藤宗兵衛が天保7年（1836）に著した『鹿角縁起』古館の項には、「寛政のころ（1789～1800）、毛布の里下小路と云所の市人何かしなるもの、麴室を造れるの節土中より瓶をほり出せしか、古銭数百千銭のありて朽もせずして青くさひたるのみなり」の記事が見られる。毛馬内の古館は、現在中世城館である当麻館跡として周知されており、ここから出土したものと推測される。

15 泉山 秋田市泉か（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「近き頃（1790年代か）城北中島の一士人、泉山の古館にて秋霧の鷹の鳥屋待せし時も古銭を拾ひ得たる事あり」。泉山の古館は、秋田市泉字三嶽根の熊野神社周辺を指すと思われ、『秋田県の中世城館』（文献9）には、泉館として周知されている。

16 福川 若美町福川（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「今とし辛酉（＝1801年）八月四日にも雄鹿福川村の農民、水かかりの堤をほりし時古銭十貫文を得たるに、宝暦の頃中石村にて得たりし銭のごとく、常にしも周流の銭の内には稀にも見る所なれば愛づる事も少し」とある。雄鹿福川村は、現在の若美町福川と思われる。

17 雄鹿の浦 男鹿市（文献10—①②）

① 菅江真澄が文化元年（1804）に著した日記『^{おがのあまかぜ}恩荷奴金風』の図絵に「享和のころ（1801～1803）雄鹿の嶼なにかしの浦に寄来る舟のうちにことくのに泉ありて、公に奉りし、のちはた磯辺にて童の拾ひたるといふを、ところどころに見し、みな常平通寶也」として、数枚の常平通寶の模写図・拓影図が載せられている。背には戸二、捻五、訓宿等の文字が認められる。同図の次頁には、大型の絵銭（厭勝銭）拓影図も見られる。これも常平銭と一緒に採集されたものか。

② 常平通寶については、真澄が文化7年（1810）に著した日記『^{おがのあまかぜ}牡鹿の寒かぜ』の図絵にも「それのとし、雄鹿の浦に破れたり小舟のたたより来けり、うちに常平通寶いといと多くつみたり。此泉、朝鮮通用の孔方也。その國の舟にや。」との説明を加えた銭貨の拓影図を載せている。両記事が同じ内容について言及しているのか否かは明らかではないが、模写・拓影図を見る限りでは別々の銭貨を掲載しているようである。

18 館神八幡 秋田市下新城字下向（文献11）

菅江真澄が文化8年（1811）に著した日記『^{のきのやまがき}簷迺金棣棠』の図絵には「館神八幡祠・・・をりとして貨幣を城山に得る事のありき。みな大観通寶のみにして」と模写図入りの説明を加えている。館神八幡は、大正四年に諸社を合併して新城神社となり、現在秋田市下新城字下向に所在する。

19 善光堂（善光寺廃寺跡） 大森町上溝（文献12）

『雪の出羽路』（平鹿郡三）上溝村の項、寺内の善光堂では、「近き年ならむか、此処より古銭幣四五貫文掘り出し事あるてふ」との記事が載せられている。同項の執筆は、文政7年（1824）とされることから1810～20年代の出土か。『秋田県遺跡地図（県南版）』（文献13）には、善光寺廃寺跡として「板碑、銭貨108枚」と記録されている。

20 四ツ屋 大曲市四ツ屋（文献2—③）

『月の出羽路』（仙北郡八）四ツ屋邑の項に、現在の大曲市四ツ屋の玉川（雄物川の支流）縁で出土したという銭貨についての記載が見られる。「文政八年（1825）乙酉三月の末その日、玉川の岸崩たり。むかしそこに了徳と云ひし医者家居跡にて、字地を了徳といふ。其跡あたりとおぼしくて古銭幣こころ出たり。そが中に五銖泉もまじりたるよし。」とし、別添の図絵には7枚の銭貨拓影図が掲載されている。銭種についての記述はないが、五銖銭の拓影はなく、天聖元寶、皇宋通寶、治平元寶、政和通寶などの銭名が判読できる。

21 子越沢田 西仙北町強首（文献2—③）

『月の出羽路』（仙北郡二）強首村の項に、「子越沢田新墾せしとき、人の白骨あまた古銭なンども掘り出たり」とあり、墓内より銭貨が出土したことが窺える。旧強首村には、根越沢田の小字名が残る。

22 安楽寺跡 六郷町安楽寺（文献2—③）

『月の出羽路』（仙北郡一二）には、六郷町大悲山真光寺所蔵の銭貨を紹介している。これによると、銭貨は「安楽寺古跡畠中に掘出る」とし、「富壽神寶、貨泉、半兩、五銖、小五銖」名を付した5枚の拓影図が載せられている。このうち、「半兩」は、長野県塩尻市吉田若宮1次出土銭の八銖半兩（前漢、B. C. 186年初鑄）に類似する。また「五銖」は、『中世の出土銭』の分類に従うと六朝期（初鑄年不詳）の五銖に、「小五銖」は、後漢期の五銖（A. D. 24年初鑄）にそれぞれ該当しそうである。なお安楽寺は、14世紀後半には廃寺となったようである。

23 千刈田 昭和町豊川龍毛字千刈田（文献14）

天保4・5年（1833・34）頃、南秋田郡豊川村龍毛の川上という人が「五合入位の小瓶」に入った銭貨を龍毛字千刈田より掘り出したようである。これら銭貨は、明治に入ってから石川理紀之助により鑑定が行われ、明治41年『古泉 川上の巻』としてまとめられている。同書には以下に記す35種216枚の銭貨の拓影が貼付されている。

開元通寶12、乾元重寶1、宋通元寶1、淳化元寶3、至道元寶6、咸平元寶2、景德元寶5、祥符元寶5、祥符通寶4、天禧通寶2、天聖元寶6、景祐元寶3、皇宋通寶23、至和元寶2、至和通寶1、嘉祐元寶4、嘉祐通寶6、治平元寶6、熙寧元寶13、元豐通寶28、元祐通寶11、紹聖元寶8、元符通寶6、聖宋元寶8、大觀通寶3、政和通寶8、淳熙元寶1、嘉定通寶1、紹定通寶1（背：

二か)、開慶通寶 1、咸淳元寶 1、正隆元寶 1、洪武通寶 20 (背: 浙、一銭各 1)、永樂通寶 12、朝鮮通寶 1 である。開元通寶の 1 枚は篆書体であることから、南唐 960 年初鑄の開元銭と思われる。さらに別の 1 枚は石川が八方穿 (中央の方孔の各辺に切り込みが認められるもの) とした加工銭である。

24 砂沢城跡周辺 五城目町羽黒前か (文献 15)

『五城目町史』によると、「砂沢城跡の近くから洪武通寶四貫文が出土」との記載がある。江戸時代の出土と思われる。また同町史には、「前平山に近い稲荷前・・・から秋の字を刻んだ古銭が出土している」とも記されている。前平山は、砂沢城跡が位置するところであるが、詳細は不明である。

25 豹が崎 男鹿市脇本富永字大倉 (文献 5・16)

前出の『雄鹿名勝誌』によると、明治 8 年 3 月 19 日大倉豹が崎において「富永村農佐藤八右衛門の堀たる古銭なり、開元通寶より永樂通寶まで二十一種取交ぜ八千八百枚」と記されている。これらの銭貨については、後年石川理紀之助が整理を行い、明治 40 年に拓影本『豹が崎』(乾、坤) にまとめている。これによると発掘されたのは明治 8 年 2 月 12 日で、「大倉の西裏なる沢田の山崎豹が崎」で出土したようである。銭貨は杉の曲物に入れられていたとされる。『豹が崎』には、次の 37 種 553 枚の拓影が貼付されている。

開元通寶 29 (うち 2 枚の背: 洛か)、乾元重寶 1、宋通元寶 4、太平通寶 4、淳化元寶 6、至道元寶 8、咸平元寶 4、景德元寶 9、祥符元寶 12、祥符通寶 7、天禧通寶 13、天聖元寶 27、明道元寶 7、景祐元寶 15、皇宋通寶 45、至和元寶 6、至和通寶 2、嘉祐元寶 5、嘉祐通寶 16、治平元寶 12、熙寧元寶 35、元豐通寶 101、元祐通寶 41、紹聖元寶 28、元符通寶 12、聖宋元寶 21、大觀通寶 3、政和通寶 24、宣和元寶 1、淳熙元寶 3、嘉泰通寶 1、開禧通寶 1、嘉定通寶 4 (背: 八、九、十一、十二)、正隆元寶 1、大定通寶 1、洪武通寶 6 (1 枚の背: 浙)、永樂通寶 38 である。開元通寶のうち 2 枚の背に洛と思われる文字が残る。開元通寶は唐朝 621 年を初鑄とする例が多いようであるが、背文字を有する開元銭は初鑄を 845 年におく、紀地銭あるいは会昌開元と称される銭のようである。また元豐通寶のうち 3 枚は前出の千刈田例同様孔の加工銭である八方穿が認められる。残りの銭貨は鑄つぶして山の神の尊像を造ったそうである。

26 家後 神岡町神宮寺 (文献 6)

『秋田貨幣史』によると、明治 15 年「仙北郡神宮寺村家後の道で一分銀三十枚発掘 (秋田日報)」とある。詳細は不明である。

27 堀内 秋田市金足字堀内 (文献 17)

明治 10～20 年代、堀内にて「地下三尺位」のところから 3,000 枚程の銭貨が出土した。銭貨は「お鉢形の容器へ、かぶせ蓋になってその中にあった」そうである。銭種の明らかなものは次の

とおりである。

淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、祥符元寶（通寶）、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、至和元寶（通寶）、治平元寶（通寶）、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、元符通寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、紹熙元寶、嘉泰通寶、嘉定通寶、紹定通寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣德通寶、朝鮮通寶の他、皇宋通寶あるいは皇宋元寶、太平通寶あるいは太平興寶、乾重、天觀という銭名も載せられている。最古銭は、太平興寶（安南970年初鑄）あるいは太平通寶（北宋976年初鑄）、最新銭は朝鮮通寶（朝鮮1423年初鑄）である。

28 寒風山山麓 男鹿市（文献6）

『秋田貨幣史』によると、明治25年「寒風山山麓より永樂通寶出土す」とある。

29 大久保 鳥海町大久保（文献18）

明治31年8月、畑耕起中に地下15cm程のところから「黒漆塗りの丸い重鉢（高さ25cm、直径35cm）」に入った多量の銭貨が発見された。その量は推定で8,000～9,000枚、重量にして27kgに達するという。銭貨の一部（147枚）は、『鳥海町史』に65種の銭名とその枚数が記されているが、存在しないはずの銭名を除いた一覧を次に紹介する。

開元通寶8、乾元重寶1、周通元寶1、宋通元寶3、太平通寶3、淳化元寶1、至道元寶4、景德元寶5、祥符元寶1、天禧通寶1、明道元寶1、景祐元寶3、皇宋通寶17、至和通寶1、嘉祐通寶3、治平元寶3、治平通寶3、熙寧元寶？2、元豐通寶11、元祐通寶3、紹聖元寶5、元符通寶1、聖宋元寶1、大觀通寶3、政和通寶3、宣和通寶1、淳熙元寶3、紹熙元寶1、慶元通寶1、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶1、大宋元寶2、紹定通寶2、皇宋元寶1、景定元寶2、正隆元寶1、和同開珎1である。最古銭は、開元通寶（唐621年初鑄）、最新銭は景定元寶（南宋1260年初鑄）であり、本出土地では大多数の中国銭に混じて和同開珎が含まれている点に特徴がある。

30 大崎 天王町大崎（文献19）

明治33年頃の編纂と推定される『天王旧蹟考』には、大崎村「上谷地の内大久保境に少し湾たる処り、・・・もと此処の潟の中に寺ありしといふ、大浪の時には古銭のよることあり」との記事が載せられている。潟は八郎潟を指す。

31 東福寺 稲川町東福寺字上野（文献20）

明治40年（1907）頃、東福寺字上野（俗称五輪石）の畑の崖上より銭貨約5,000枚が出土した。「表土下二尺位の処より丸木を割り抜いた船形の容器に栈木に積んで」あったそうである。出土当時銭種は、53種あったようであるが、現在は次の30種48枚が確認されている。

開元通寶2、宋通元寶1、太平通寶1、淳化元寶1、至道元寶2、咸平元寶1、景德元寶1、祥符通寶1、天禧通寶1、天聖元寶3、明道元寶1、景祐元寶1、皇宋通寶4、至和元寶2、嘉祐通寶1、治平元寶2、熙寧元寶2、元豐通寶2、元祐通寶2、紹聖元寶1、元符通寶2、聖宋元寶3、大

観通寶 1、政和通寶 2、宣和通寶 3、紹熙元寶 1、嘉泰通寶 1、紹定通寶 1、淳祐元寶 1、治聖元寶 1 である。

32 廣根 八郎潟町一日市昼寝下（文献21）

明治42年、一日市の「ひろねという処の畑中」より銭貨が約7,000枚掘り出された。出土したのは4月28日に約5,000枚、5月3・4日に約2,000枚の2度にわたるようであり、その地点は同一ではないものの、ほぼ隣接する場所で発見されたようである。このことは発見者の畠山喜代治という人が、石川理紀之助に鑑定を依頼した文書に添付されていた略図により明らかである。これによると出土地に隣接して神社（社地）があり、その西側に二階堤が描かれている。現在この両者は存在しないが、堤の位置から推定すると、神社は大正3年に一日市神社に合祀された相染神社のようであり、出土地は現在の一日市昼寝下にあたるようである。銭貨の分類をおこなった石川は、大正4年に『ひろねのいづみ』としてまとめている。同書には枚数の記載はないものの、次の44種の銭名が記されている。

開元通寶、乾元重寶、唐國通寶、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、祥符元寶、祥符通寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、至和通寶、嘉祐元寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、紹熙元寶、慶元通寶、嘉泰通寶、開禧通寶、嘉定通寶、紹定通寶、淳祐元寶、皇宋元寶、景定元寶、咸淳元寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶である。

33 一向遺跡 男鹿市船越字一向（文献22）

前出の『絹篩』船越村の項には、一向において江戸時代より井戸跡、瀬戸類が土中より出土することが記されている。この時期の瀬戸類は現存しないようであるが、明治時代には、「曲物の井戸数個と黄瀬戸、志野をはじめとする陶器と壺入りの古銭2,000枚を掘り出」されている。このうち『船越誌』には、銭貨16枚の拓影図が載せられており、開元通寶、景德元寶、祥符通寶、天聖元寶 2、熙寧元寶、元豐通寶 2、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶の銭名が判読できる。なお、同地は八郎潟干拓事業に伴う新水道工事の際（昭和38年）にも多くの井戸枠や陶磁器類が出土しており、昭和40年には銭貨も採集されている。

34 鶴ノ木経塚 若美町鶴木か（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「琴浜村鶴ノ木経塚から度々古銭出土す」とある。明治年間の出土か。琴浜村鶴ノ木とは若美町鶴ノ木を指すものと思われるが、現在同地区周辺では塚・経塚は周知されていない。

35 藤田 昭和町大久保字天神下か（文献23）

石川理紀之助がまとめた『適産調』大久保村の項（明治34年編）には、「古銭 藤田の清水の出づるその街道の西の畑より出たる由 天神社の辺にもあり」との記録がある。藤田は現在の昭和町大久保字天神下あたりか。

36 鶴ノ木・焼山 秋田市寺内（文献4）

前出の『寺内町誌』古銭の項には、明治期の出土例にも言及している。「明治年間にも古銭入りの甕が屢々発見された。これは筆者も度々見たことがあるが、唐、宋の古銭で、他所によく見る洪武、永楽の如き元明時代のものではなかった。出土箇所は鶴ノ木と焼山とである。」

37 加護山遺跡 ニツ井町荷上場字加護山（文献24）

銭貨は、その鑄造地でも発見されることがある。加護山は、阿仁銅山の粗銅を製錬するため安永3年（1774）に創設された吹分処（製錬所）である。文久2年（1862）から明治3年（1870）までの約8年間には、秋田一両銀判、秋田二分銀判等の銀銭、秋田銅山至寶百文銭、加護山一文銭（寛永通寶）等の銅銭を含め12種の銭貨も密鑄造されていた。ここは藤琴川（米代川支流）左岸縁に立地しており、明治27年（1894）の閉所後には、跡地あるいは河床より各種銭貨、埴塼等の用具が度々出土している。これらの出土遺物から加護山での鑄銭が立証されたことになる。

38 厨川谷地遺跡 千畑町土崎字厨川谷地（文献25）

大正4年秋、厨川谷地の水田下より2度にわたり計約12,000枚の銭貨が掘り出された。埋納していた容器の有無は不明であるが、銭貨は「二尺ほどの藁らしいものと一緒に」出土したようである。その他の遺物には、「飯器、須恵器の破片・・・住家が消失したと思われる多量の凝灰物も見られたと伝えられている」がある。

大正13年9月、内務省史蹟考查官柴田常恵が銭貨約500枚を鑑定し、「大部分が宋代の銭である。「洪武通寶」「永楽通寶」などは1枚も見当たらなかった。・・・（3枚の）「五銖」銭を発見した。其の外珍しいのに「建炎通寶」がある」と記録されているが、その他の銭種は明らかではない。

39 土沢 湯沢市土沢字西土沢（文献26）

大正5年頃、山田村「土沢字西土沢の畑地より古銭貨一千余枚」が出土した。「発掘当時の状況を聞くと、土を掘って木炭を敷き詰め、その上に古銭貨を棧木に積み重ねてあった」そうである。現在600～700枚が現存しているようである。『湯沢市史』によると、判読されている銭種は次の28種、100枚である。

開元通寶1、乾元重寶1、太平通寶3、淳化元寶4、至道元寶4、咸平元寶1、景德元寶5、祥符元寶1、天禧通寶5、天聖元寶6、景祐元寶2、皇宋通寶8、至和元寶3、嘉祐通寶2、治平元寶11、熙寧元寶6、元豐通寶7、元祐通寶6、聖宋元寶6、大觀通寶2、政和通寶5、宣和通寶4、

建炎通寶 1、慶元通寶 1、嘉泰通寶 1、嘉定通寶 1、淳祐元寶 2、正隆元寶 1 である。

40 松木沢 若美町松木沢字松木（文献27）

大正 8・9 年頃、松木沢字松木において「裏庭に池をつくるため掘りくぼめたところ壺に入った古銭が出土した」。銭貨には寛永銭が「混入していたかもしれない」とのことである。

41 綾之小路 秋田市寺内字鶴ノ木（文献 4）

『寺内町誌』には、「最近大正十一年旧二月九日の朝、現在寺内町綾之小路の長澤巳之吉氏の畑地より、土を採取している時鍬先に当たった異常なものが古銭を入れた甕であった。甕は決して精巧なものではなく、指痕のはっきりしている古代美術を歴然と物語る稚拙なものであった。一部は古四王神社に大事に保管され、一部は・・・香爐と花挿に鑄直され」たそうである。寺内町綾之小路は、現在の寺内字鶴ノ木にあたる。

42 物見 八森町物見（文献27）

『八森郷土誌資料』第27号によると、大正13年、八森町物見において鉄道工事中に「渤海の古銭が多量に出土した」との記載が見られる。詳細は不明である。なお物見の近くの林ノ沢では昭和59年に多量の銭貨が出土している。

43 牛形城跡 稲川町大倉字館（文献 9）

『秋田県の中世城館』によると、中世城館牛形城では、「大正末年に三居沢から宣徳通寶を下限とする明・宋銭が279枚発掘され、漆埋蔵の伝説を伝える」との記載がある。

44 館山 男鹿市船川港双六字館山（文献27）

昭和初年、双六字館山で建築工事中壺入りの古銭を掘り出したといわれる。ここには中世城館である双六館が位置している。

45 丁刃森 仁賀保町平沢

昭和初年、日本海に注ぐ小河川である大沢河口改修の際、独立小丘状を呈する丁刃森南辺より、経石とともに銭貨が出土したという。経石は、丁刃森中腹に座する板碑（建武碑：建武四年の年号が彫られている）の下に埋め戻されたそうであるが、銭貨の所在は不明である。ただし出典は明らかではないが、昭和 6 年頃に記録されたと思われる銭貨の略図（線書）が残されており、それには次の22種39枚が図示されている。

開元通寶 1、乾元重寶 1、咸平元寶 1、景德元寶 1、祥符元寶 1、天禧通寶 1、天聖元寶 2、景祐元寶 1、皇宋通寶 4、至和元寶 3、嘉祐元寶 2、治平元寶 1、熙寧元寶 3、元豐通寶 2、元祐通寶 3、紹聖元寶 2、元符通寶 1、聖宋元寶 4、政和通寶 2、宣和通寶 1、淳熙元寶 1（背：十三）、紹定通寶 1 である。

本出土例は、遠田喜一氏（仁賀保町文化財保護協会）から教示いただいた。

46 睦成 横手市睦成（文献 6）

『秋田貨幣史』によると、昭和7年「横手川護岸工事中、寛永錢、当百錢、明治銅貨等約三十貫出土す」とある。詳細は不明である。

47 館ヶ沢館跡 河辺町三内字館ヶ沢（文献29）

昭和9年6月頃、三内字館ヶ沢地内で畑地開墾中に錢貨が出土した。出土枚数、外容器の有無は不明であるが、錢貨は紐で通して結ばれていたようであり、現在20枚発見者宅に保管されている。『河辺町の遺跡』には、咸平元寶、天禧通寶、至和元寶（あるいは通寶）、元豐通寶、元祐通寶、洪武通寶等の錢名が記されている。館ヶ沢は、岩見川（雄物川の支流）右岸に立地する小規模な館跡として周知されている。

48 八幡神社下 大曲市丸の内町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和9年「大曲市八幡神社下の雄物川の欠地より宋錢度々出土す」とある。八幡神社下には、雄物川の支流丸子川が流れており、ここから出土したものらしい。

49 寺内大悲寺跡・勝平山 秋田市寺内・新屋（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和10年「高清水大悲寺跡、勝平山から唐宋錢出土す」とある。大悲寺は、現在秋田市旭北寺町に位置するが、これは江戸時代初期に秋田藩主佐竹義宣が現在地に移したものであり、古記によると土崎湊三ヶ寺の一として、弘安6年（1283）に寺内字焼山に創建されたと伝えられている。『大悲寺七百年史』（文献30）によると「大悲寺跡から中国の宋錢が数十枚、出土した」と記されている。一方勝平山は、秋田市新屋に位置する標高49.4m程の小山を指すと思われるが詳細は不明である。

50 十和田湖中湖 小坂町休屋（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和10年頃「十和田湖、十和田神社の占場の湖水から夥しい金、銀、銅、鉄錢、銀貨、銅貨が潜水夫によって引き揚げられる」とある。占場の湖水は、十和田湖に突き出る二本の半島に挟まれた中湖を指す。占場は、十和田湖第一の靈地とされ、神社参拝者がここから浄財を湖中に投ずる風習があり、水揚げされた錢貨は信仰に伴う賽錢と推定される。

51 内林遺跡 峰浜村石川字内林（文献31）

昭和15年頃、塚に納められていた甕の内部より少量の錢貨が発見された。峰浜村教育委員会の松田純一氏の教示によると、塚を覆っている土にはたくさんの石が入っていたことから積石塚かもしれない。甕は二斗甕でいくつも並んで出ており、塚を掘った人は染物でもやっていたのではないかと考えたそうである。錢貨が入っていたのはその内の1つであり、少ししか出ていないようである。現在錢貨及びその容器である甕の所在は明らかではない。なお「秋田県遺跡カード」には、「戦前迄は経塚が存在していたが、農耕の為整地された。・・・付近に方形で土壇状の地形をした場所を確認している。」との記載もある。

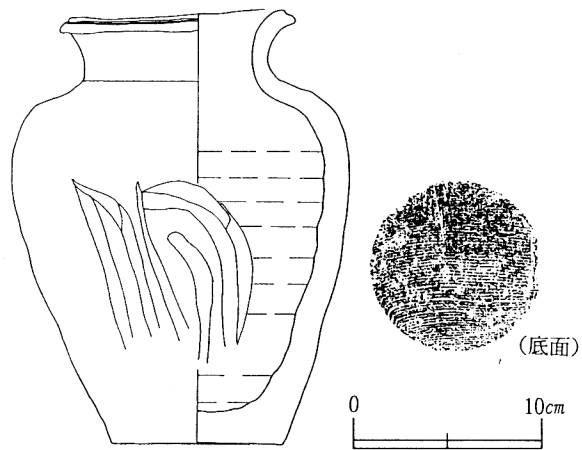
同遺跡は、昭和53年に圃場整備事業に伴う範囲確認調査が実施されている。この結果では「小規模な空濠」や溝状遺構、ピットが検出され、土師質土器（かわらけの坏・皿）、珠洲系陶器（甕・壺）、青磁片などが出土している。時期的には13世紀代と推定される。

52 浜館跡 西目町出戸字館

昭和17年4月、浜館跡公園化に伴う工事中、紐で結わえられた銭貨が両手一杯程（200～300枚位か）出土したそうである。しかし錆着していたことから大部分は捨てられたようである。この時の工事では、石鉢、土器、焼米等も発見されている。銭貨の一部は西目町公民館の斎藤俊明氏により判読されている。内訳は開元通寶、太平通寶、咸平元寶、天聖元寶、皇宋通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、咸淳元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶、紹平元寶？の19種類である。なお、同館跡では昭和50年にも銭貨の出土例が報告されており、後記する。

53 鶴ノ木 秋田市寺内字鶴ノ木（文献4・32）

出土した時期は明示されていないが、『寺内町誌』には、「壺形土器であって、器の全面に斜行した細い縄目文が印せられてある。唐、宋の古銭が沢山這入ってあった。出土箇所は鶴ノ木で、国道の北側地表下三尺有余、摺鉢やうのものに覆われてあった。高一尺三寸、口径六寸五分、底径三寸七分、口に近く縊れた所周囲一尺八寸、口厚四分、胴の最も膨れた所周囲三尺二寸一分」と記されている。この壺は、その法量から現在秋田市教育委員会に所蔵されている珠洲系陶器の壺を指すものと考えられる。陶器の製作年代は、珠洲編年に従うとⅡ期にあたり、13世紀前半～中頃と見られる（第4図）。



第4図 鶴ノ木出土と推定される珠洲系の壺

54 横手城本丸 横手市城山町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「横手城本丸の曲り道から洪武通寶出土」とある。時期は不明であるが、戦前のようなものである。

55 角間川 大曲市角間川町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「大曲市角間川の横手川々欠地より宋銭度々出土」とある。時期は不明であるが、戦前のようなものである。

【一括大量出土地】

一括大量銭は、その出土後に分配されたり、銅器に改鑄されたり、あるいは戦時中には銅素材として供出され、銭種はおろか数量すら明確でない場合が多い。ここではある程度銭種の分類がなされている大量中世銭出土例（56～68）、近世銭が主体あるいは客体的に混じる例（69・70）、銭種等ほとんど不明確な例（71～84）に分けて記述する。

56 林ノ沢 八森町林ノ沢（文献33）

昭和59年7月2日、日本海汀線まで200m程の八森町林ノ沢台地にて土止工事中に地下40cm程のところで曲物に入れられていた多量の銭貨が発見された。曲物は、現在その底板のみ残存しており、底径は24cm、厚さ0.5cmである（写真1左）。銭貨と共に保管されていた中に薬紐（径2.5～3mm程で左撚り、写真1右）があり、銭緒^{しし}の状態^{しし}で埋納されていたと思われる。『秋田魁新報』7月7日付に「中国の古銭6,700枚ザクザク、八森で工事中に発見」との記事も掲載されている。出土銭は、昭和62年に佐々木正雄氏が総数6,720枚を55種に分類している。銭種は以下のとおりである。

五銖6、開元通寶532、乾元重寶15、周通元寶2、唐國通寶3、宋通元寶17、太平通寶58、淳化元寶51、至道元寶115、咸平元寶106、景德元寶156、祥符元寶183、祥符通寶63、天禧通寶152、天聖元寶297、明道元寶18、景祐元寶78、景祐元寶か8、皇宋通寶861、至和元寶83、至和通寶29、嘉祐元寶82、嘉祐通寶127、治平元寶103、治平通寶14、熙寧元寶723、元豐通寶763、元祐通寶607、紹聖元寶279、元符通寶91、聖宋元寶260、大觀通寶84、政和通寶248、宣和通寶16、建炎通寶1、淳熙元寶36（背：十、十一、十四～十六あり）、紹熙元寶6（1枚の背：四）、慶元通寶11（1枚の背：四）、嘉泰通寶5、開禧通寶4、嘉定通寶26（背：元、六、十～十三あり）、大宋



写真1 林ノ沢出土の容器底板（左）と緒用の薬と容器断片

元寶 3、紹定通寶11（背：四～六）、端平元寶 1、嘉熙通寶 4（1枚の背：三）、淳祐元寶 7、皇宋元寶14、景定元寶 9、咸淳元寶10（1枚の背：二）、正隆元寶 3、天聖通寶？9、至正元寶？1、咸元通寶？2、判読不能327である。五銖は、実見した限りでは「五」の字形より後漢期と思われる。元祐通寶のうち1枚は孔を円形に加工しており、また淳熙元寶の1枚は孔が八方穿を示す加工銭である。

遺物は現在、八森町教育委員会に保管されており、銭貨の一部は額装され町内の小中学校・公民館に展示されている。

57 上平張遺跡 能代市檜山字上平張（文献34）

昭和53年6月23日、能代市檜山の瀬戸沢と称される沢先端に位置する新田堤の水位の下がった水辺で青錆で覆われた多量の銭貨が発見された。銭は縄状のもので結わえられていたそうであるが、容器は確認できなかった。出土枚数は発見者が直後に記載したと思われるメモには4,960枚（筆者実見）とあり、出土時に一部はバラで見つかっていることから、埋納時は5,000枚以上であったと推定できる。現在の保管枚数は4,764枚である。このうち『能代市史』考古編には、武田孝義氏が2,220枚の分類を行っている。その銭種は次のとおりである。

開元通寶100、乾元重寶 5、唐國通寶 4、宋通元寶14、太平通寶30、淳化元寶46、至道元寶61、咸平元寶70、景德元寶72、祥符元寶128、天禧通寶61、天聖元寶69、明道元寶 9、景祐元寶17、皇宋通寶180、至和元寶 8、至和通寶 2、嘉祐元寶10、嘉祐通寶14、治平元寶18、熙寧元寶70、元豐通寶244、元祐通寶123、紹聖元寶67、元符通寶14、聖宋元寶64、大觀通寶 4、政和通寶39、宣和通寶 3、淳熙元寶 7、慶元通寶 2、嘉泰通寶 2、嘉定通寶 2、大宋元寶 1、紹定通寶 1、皇宋元寶 1、景定元寶 1、正隆元寶 2、大定通寶 1、洪武通寶15、永樂通寶625、宣徳通寶14である。その他「中国銭のほか朝鮮の朝鮮通寶、安南銭が含まれ、和銭（皇朝銭）はない。」と記している。銭貨は現在発見者宅に保管されている。

58 新大林遺跡 ニツ井町飛根字新大林（文献35）

昭和38年11月、米代川左岸の河川敷に程近い平坦地、大林の通称「やしきの畑」から「曲げっぱのような桶にびっしり入っていた」銭貨が発見された。出土総数約1万枚との記載はあるが、正確な枚数は明らかではない。銭名は次の21種が『ニツ井町史』に記されている。

開元通寶、乾元重寶か（町史には唐朝の乾元大寶と記載）、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、景德元寶、天聖元寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、慶元通寶、紹定通寶、景定元寶、洪武通寶である。

銭貨は現在発見者が保管しているようである。

59 北浜野 男鹿市五里合中石字北浜野（文献27）

昭和54年、日本海汀線まで約300mの砂丘上（標高18m）に位置する北浜野において、砂を採

取中に「一塊の古銭があらわれ」た。「古銭のほか何等の伴出物はなく、裸のまま埋められていた」ようであるが、銭貨の穿には「埋蔵当時と思われる藁が付着しており」縊の状態で埋納されていたと考えられる。磯村朝次郎氏らが「男鹿半島出土の古銭」の中で出土銭貨の分類と分析を行っている。銭種は以下のとおりである。

開元通寶87、乾元重寶 1、唐國通寶 1、宋通元寶 6、太平通寶 9、淳化元寶 8、至道元寶23、咸平元寶16、景德元寶27、祥符元寶28、祥符通寶25、天禧通寶32、天聖元寶53、明道元寶 2、景祐元寶20、皇宋通寶151、至和元寶10、至和通寶 5、嘉祐元寶27、嘉祐通寶24、治平元寶30、治平通寶 7、熙寧元寶131、元豐通寶138、元祐通寶101、紹聖元寶46、元符通寶12、聖宋元寶48、大觀通寶 5（背：四、六、十一、十三、十四）、政和通寶47、宣和通寶 3、淳熙元寶 5、紹熙元寶 1（背：元）、慶元通寶 5（うち 2 枚の背：二、三）、嘉泰通寶 1（背：元）、嘉定通寶 5、紹定通寶 3（うち 2 枚の背：元、三）、淳祐元寶 1、正隆元寶 4、大定通寶 2、至大通寶 1、大中通寶 1（私鑄銭）、洪武通寶112（背：福、浙各 1 枚、一福32枚）、永樂通寶123、島銭 1、無文銭370、判読不能10の計44種1,768枚である。同報告には、銭貨の書体、背文字、鑄溜り、私鑄銭の有無等について分析が行われ、所見が加えられている。

60 打越 男鹿市船川港双六字打越（文献27）

昭和30年頃、双六字打越の畑地から耕作中に「ミゴ縄を通した古銭を発掘。むしろにいったい広げるだけあり、寛永銭は含んでいなかった」ようである。銭種は、開元通寶、淳化元寶、祥符元寶（通寶）、皇宋通寶、治平元寶（通寶）、元豐通寶、紹聖元寶（通寶）、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、淳熙元寶、正隆元寶、大中通寶、洪武通寶、朝鮮通寶の15種認められるという。

61 今戸遺跡 井川町今戸字寺の内（文献36）

昭和49年、今戸字寺の内浅野氏宅地内で防火水槽工事中に「地下2・3mの粗い青砂の層から」多量の銭貨が出土した。出土量は「ポリバケツで三分の一くらい」である。その後、大多数は散逸してしまったが、225枚の銭種の判読が行われている。

内訳は開元通寶22、乾元重寶 2、宋通元寶 1、太平通寶 2、至道元寶 4、咸平元寶 3、景德元寶 3、祥符元寶 4、祥符通寶 3、天禧通寶 2、天聖元寶10、景祐元寶 3、皇宋通寶 32、至和元寶 3、至和通寶 1、嘉祐元寶 4、嘉祐通寶 9、治平元寶 1、治平通寶 1、熙寧元寶17、元豐通寶28、元祐通寶31、紹聖元寶 9、元符通寶 2、聖宋元寶 6、大觀通寶 2、政和通寶 7、宣和通寶 1、淳熙元寶 1、紹熙元寶 1、淳祐元寶 3、景定元寶 1、咸淳元寶 2、判読不能 4 である。淳祐元寶のうちの 1 枚は 2 文銭（折二銭）である。

遺物の一部は現在、井川町歴史民俗資料館に保存展示されている。

62 豊岩 秋田市豊岩豊巻字居使（文献37）

昭和52年8月26日、豊岩豊巻字居使に所在する湯沢院の裏山で同寺の墓地拡張工事中、深さ約30cmの土中より1,486枚の銭貨が出土した。容器は発見されていないが、銭貨穿内に縄が一部残存することから、緇の状態で埋納されていたことが窺える。銭種は次のとおりである。

開元通寶80、乾元重寶5、唐國通寶1、宋通元寶7、太平通寶9、淳化元寶9、至道元寶19、咸平元寶20、景德元寶26、祥符元寶29、祥符通寶18、天禧通寶30、天聖元寶66、明道元寶8、景祐元寶15、皇宋通寶150、至和元寶9、至和通寶5、嘉祐元寶9、嘉祐通寶19、治平元寶25、治平通寶3、熙寧元寶100、元豐通寶153、元祐通寶109、紹聖元寶42、元符通寶15、聖宋元寶47、大觀通寶13、政和通寶50、宣和通寶3、淳熙元寶3（背：月、十、十二）、慶元通寶5（背：元、四）、嘉泰通寶2（1枚の背：二）、嘉定通寶3（背不明）、淳祐元寶2（背：二）、皇宋元寶1（背不明）、景定元寶1（背：二）、正隆元寶1、洪武通寶79（背：浙5枚、一錢1枚）、永樂通寶201、宣徳通寶11、朝鮮通寶5、判読不能78である。

63 深沢 本荘市親川字深沢

昭和59年12月2日、親川字深沢の砂採取跡地（日本海汀線まで600m程の砂丘地）で砂遊びをしていた中学生2人が、甕に入った多量の銭貨を発見した。『秋田魁新報』12月5日付には、「中国の古銭ザクザク・・・2360枚」との記事が載せられている。同紙によると、銭貨が出土したのは、「地下3mほどの土中だった」とされる。甕は10片程に割れていたが、接合の結果、胴下半部から底部のみの珠洲系陶器甕（写真2、底部は静止糸切り）であることが判明した。現況での法量は、高さ16.3cm、底径9.8cm、最大径28.5cmであり、陶器内部には緑青が付着しており、明らかに銭貨が入れられていたことを物語る。出土銭貨は現在、容器である甕と共に本荘市郷土資料館に2,426枚が保管展示されており、同館において整理作業が継続中である。判読した銭



写真2 深沢出土の容器に入った銭貨

種は、平成8年2月20現在で次の40種593枚である。

開元通寶63、乾元重寶2、宋通元寶2、太平通寶13、淳化元寶6、至道元寶9、咸平元寶12、景德元寶11、祥符元寶11、祥符通寶3、天禧通寶14、天聖元寶31、明道元寶8、景祐元寶10、皇宋通寶62、至和元寶3、至和通寶2、嘉祐元寶8、嘉祐通寶4、治平元寶17、治平通寶3、熙寧元寶44、元豐通寶55、元祐通寶50、紹聖元寶29、元符通寶6、聖宋元寶14、大觀通寶20、政和通寶45、宣和通寶6、淳熙元寶9、紹熙元寶4、慶元通寶2、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶5、大宋元寶1、紹定通寶1、景定元寶3、正隆元寶3である。

本例は本荘市教育委員会の長谷川潤一氏の教示を得た。

64 阿部堂遺跡 仁賀保町両前寺字阿部堂

昭和50年、両前寺字阿部堂に所在する香取神社脇の北側斜面において道路拡幅工事中に麻縄に通した360枚の銭貨が発見された。現在銭貨は、両前寺の公民館に143枚、町勤労青少年ホームに12枚の計155枚が保管・展示されている。その内訳は次のとおりである。

開元通寶16、宋通元寶1、太平通寶1、淳化元寶1、至道元寶2、咸平元寶2、景德元寶7、祥符元寶7、祥符通寶1、天禧通寶4、天聖元寶8、景祐元寶2、皇宋通寶27、至和元寶2、嘉祐元寶3、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶11、元豐通寶14、元祐通寶16、紹聖元寶16、元符通寶2、聖宋元寶8、政和通寶2であり、最新銭が北宋1111年初鑄の政和通寶である点に特徴がある。本例については、遠田喜一氏（仁賀保町文化財保護協会）、池田史郎氏（仁賀保町教育委員会）に御高配をいただいた。

65 谷地田 南外村字谷地田（文献38）

昭和45年9月8日、林道改修工事中に地表より20～30cm位下で曲物に入った多量の銭貨が出土した。『秋田民報』9月12日付けの記事によると、「直径32cm、高さ23cmのマサ目の曲げわっぱのようなもの」に50種類約13,000枚、重量にして39kgの銭貨が発見されている。個々の銭名の記載はないが、最古銭は開元通寶、最新銭は皇宋元寶（南宋1253年初鑄）と記されている。これら銭貨は後日古物商に売却したとのことである。

66 二井山 雄物川町二井山字七滝（文献39）

昭和37年、二井山の法龍山日宮山（神社）において、杉苗植林中に地下約30cmのところから、木箱（約30cm四方）に入った状態で銭貨が出土した。出土時の枚数は不明であるが、現存する519枚については整理されている。

内訳は開元通寶23、宋通元寶1、淳化元寶5、至道元寶11、咸平元寶9、景德元寶11、祥符元寶45、天禧通寶12、天聖元寶13、明道元寶3、景祐元寶3、皇宋通寶12、治平元寶2、熙寧元寶13、元豐通寶11、元祐通寶3、聖宋元寶3、大觀通寶4、政和通寶13、宣和通寶2、淳熙元寶2、開禧通寶1、正隆元寶2、至大通寶9、洪武通寶101、永樂通寶3、宣徳通寶9、大和通寶1、洪

順通寶 1、大世通寶 3、判読不能188である。最古銭は開元通寶（唐621年初鑄）、最新銭は洪順通寶（安南1509年初鑄）であり、琉球銭である大世通寶（1454年初鑄）も含まれる。銭貨の一部は現在雄物川町郷土資料館に展示しており、その他は発見者宅で保管している。

67 植田 十文字町植田字植田（文献40）

平成2年2月9日、植田字植田の住宅地で3,088枚の銭貨が出土した。ここでは排水路を作るため溝を掘っていたところ、地表下約1mの深さから紐状のもので束ねていた銭貨が一塊の状態で発見された。外容器の有無は不明であるが、銭貨水洗いの際に小さな木片が認められたことから木製の器に入れられていた可能性はある。また銭貨以外の遺物は確認できなかったそうである。

これら銭貨は、十文字町史編纂室により分類が行われており、銭名と共に書体についても調べられている。ここでは銭種とその枚数のみ引用させていただく。

五銖 3、開元通寶296、乾元重寶 7、宋通元寶 3、太平通寶26、淳化元寶18、至道元寶22、咸平元寶41、景德元寶55、祥符元寶80、祥符通寶34、天禧通寶55、天聖元寶120、明道元寶 7、景祐元寶40、皇宋通寶346、至和元寶13、至和通寶 3、嘉祐元寶15、嘉祐通寶36、治平元寶40、治平通寶 2、熙寧元寶233、元豐通寶337、元祐通寶281、紹聖元寶116、元符通寶32、聖宋元寶98、大觀通寶53、政和通寶155、宣和通寶 3、淳熙元寶12、紹熙元寶 1、慶元通寶 1、嘉泰通寶 2、嘉定通寶13、淳祐元寶 1、正隆元寶 3、判読不能485である。最古銭は五銖（後漢24年初鑄）、最新銭は淳祐元寶（南宋1241年初鑄）である。

遺物は町教育委員会で保管しており、一部は町十字館に展示している。

68 前田面 稲川町三又字前田面（文献20）

昭和41年8月21日、三又村字前田面において児童館敷地工事中、「表土下二尺くらいのところより高さ一尺、直径八寸の曲ワッパにびっしり詰込まれた古銭貨約七千枚」出土した。曲物の内部には漆が塗ってあったそうである。銭種が判明しているのは次の21種26枚である。

開元通寶 1、太平通寶 1、咸平元寶 1、祥符通寶 1、天聖元寶 4、皇宋通寶 1、嘉祐通寶 1、治平元寶 1、熙寧元寶 1、元豐通寶 2、元祐通寶 1、紹聖元寶 1、元符通寶 1、大觀通寶 1、政和通寶 2、淳熙元寶 1、紹熙元寶 1、大定通寶 1、洪武通寶 1、永樂通寶 1、宣徳通寶 1 である。

69 八郎潟湖底 大潟村（文献41）

昭和45年4月13日、大潟村訓練農場A6圃場において、表土下約10～80cmのヘドロ層より、「カマスにはいていたとみられる麻ヒモで通された古銭が約60キログラム単位で六ブロック」が発見された。各ブロックは、約20m間隔で一直線上に3ブロック、これと平行するように他3ブロックも約20m間隔で一直線上に並んで発見されたようである。出土銭を調査された上野昭夫氏は、同年6月と12月の2度にわたり『秋田魁新報』紙上に分析等の資料を寄稿されてい

る。前者では、分析した枚数は明示されていないが、錢種の出土比率を記している。これによると、至元通寶 3%、永樂通寶 5%、寛永通寶文銭 5%、寛永通寶足銭 1%、寛永通寶元銭 6%、寛永通寶無銘 80% であり、全体の 92% が寛永通寶であると報告している。また後者では、出土層位から次の 3 種に分類している。A：輸入銭混入寛永通寶群、B：寛永通寶群、C：、寛永通寶群であり、B については、輸入銭、鉄銭の混入はないそうである。

その後（出土時期不明）同じ A6 圃場で「カマス入りのほかにカメにはいったと思われるものも発見」したという。これは鉄銭の混じる寛永通寶群のようである。

また、A6 圃場の西隣の A5 圃場でも昭和 44 年 9 月に「永樂通寶を中心とする」銭貨が出土したとの記述もある。

これら出土銭は、その位置が伝漕航路上にあたることから、船の積み荷であった銭貨が何らかの事情で投棄したか沈没に伴う遺棄等の推定が可能である。

70 鹿の沢 男鹿市船川港比喩字鹿の沢（文献 27）

出土の時期は明らかではないが、船川港比喩字鹿の沢で「造園用の採石作業中、石の下から古銭の出土があり、人夫の 1 人がリックいっぱいづめてひそかに持ち去ったという」。出土銭には寛永銭が含まれており、939 枚が現存するという。

71 夜叉袋 八郎潟町一日市字夜叉袋（文献 42）

昭和 34 年春、八郎潟町夜叉袋地区で耕地整理中、地表下約 1.5 m の粘土層より多量の銭貨が出土した。銭貨は無文銭、宋銭類が千枚程で「玉石でもって囲まれ埋れていた」そうである。発見当時、出土銭を分析した秋田古泉会では、無文銭、宋銭とも地元で鑄造された私鑄銭と想定している。また『秋田貨幣史』には、「明治初期のニセ一文銭多量に出土」と記されている。

72 浅見内 五城目町内川浅見内（文献 15）

『五城目町史』によると、昭和 48 年に「内川浅見内の某家の屋敷内から古銭が大量に出土した」ようである。浅見内には中世城館とされる浅見内館跡や五輪塔、板碑が存在する。

73 太平神社裏 秋田市寺内か（文献 6）

『秋田貨幣史』によると、昭和 35 年「高清水丘太平神社裏手畑中より二貫八百目の宋銭出土す」とある。現在高清水地区には太平神社は存在せず、詳細は不明である。

74 才之神 鳥海町才之神字中谷地（文献 18）

昭和 33・34 年頃、才之神字中谷地の田地改修工事の際銭貨が出土した。『鳥海町史』によると、「土中から丹念に拾い集めたもの約 150 枚。そのすべてが宋銭である」と記されている。容器の有無、銭種の記載はない。

75 峰吉川小学校 協和町峰吉川（文献 6）

『秋田貨幣史』によると、昭和 42 年「協和町峰吉川小学校の高台で道路工事中五貫六百目の唐

宋銭出土」とある。同字句以外の詳細は不明である。

76 坂繁 西仙北町円行寺字坂繁（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和40年「大沢郷坂繁の開墾地から唐宋明銭四十八種九百八十枚発掘」とある。大沢郷坂繁は、現在の西仙北町円行寺字坂繁にあたるようである。

77 大町 大曲市大町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和29年「大曲市大町のビル工事中、カメに入った古銭多量に出土す」とある。詳細は不明である。

78 土崎 千畑町土崎（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和30年「千屋村土崎の田より唐宋明銭三貫余出土す」とある。

79 土崎林 千畑町土崎字土崎林（文献43）

昭和36年7月15日付『仙東新聞』によると、5月7日、千畑町土崎字土崎林で水路工事中、曲物に入った「古銭が約26.2kg（7貫目）」出土したそうである。詳細は不明であるが、同紙には20数年前にも同地で「カマスにはいった古銭をたくさん見つけた」とも記されている。

80 畑屋 千畑町畑屋（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「畑屋村で数貫目の宋銭出土す」とある。昭和30年代の出土と思われる。

81 上鑪田 六郷町鑪田（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和35年「六郷町上鑪田で開田中、宋銭約六貫目出土す」とある。

82 黒森 角館町山谷川崎（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和45年「角館町黒森の田、地下七十糎の所から宋銭明銭多数出土す」とある。黒森は、角館町北部の山谷川崎字黒森を指すと思われる。

83 君堂 仙南村飯詰字君堂（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和32年に「飯詰字君堂の田から約十貫目唐宋明銭出土」と記載されている。発見者宅に照会したところ、銭貨は現在所在不明とのことである。

84 横堀 雄勝町横堀（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「雄勝郡横堀村井戸掘り中に、宋銭約六貫出土」とある。昭和20年代の出土と思われる。詳細は不明である。

【一括少量出土地】

小稿では100枚以上200枚未満の銭貨一括出土を一括少量出土地としてまとめる。

85 新斗米館跡 鹿角市花輪字新斗米（文献44）

奥羽山脈西麓から樹枝状に伸びた台地先端部に立地する館跡である。沢を挟んだ北側の台地

には小枝指館跡が位置する。昭和54年に第1次調査、翌年に第2次調査が実施され、竪穴住居跡、竪穴遺構、土室状遺構、溝跡などが検出された。銭貨は遺構内外より240枚発見され、うち185枚は緋の状態で一括出土している。

第1次調査では、遺構内外より8枚の銭貨が出土した。内訳は第1号竪穴2、大溝状遺構4、遺構外2である。銭種は洪武通寶、永楽通寶、天□元寶と報告されているが、どの銭貨がどこから出土したのかについての記載はない。

第2次調査では、232枚の銭貨が出土した。このうち有銘銭は10枚であり、判読できた6枚は、景德元寶1、皇宋通寶1、紹定通寶1、洪武通寶3（うち1枚は私鑄銭）である。遺構内では、8遺構より43枚の銭貨が出土しており、内訳は第8号竪穴第1層で無文銭1、第18a 竪穴床面で□元通□1、無文銭1、第18b 竪穴床直上面で無文銭3、第19 竪穴で無文銭1、第25号竪穴埋土中で無文銭1、第26竪穴床面で景德元寶1、第32竪穴床面で洪武通寶1、埋土中で無文銭1、土室状遺構より32枚（洪武通寶1、無文銭28、判読不能3）である。

一方、遺構外では189枚の銭貨が出土しており、「縄状の紐に通した185枚の無銘銭が一括で出土」している。これら無文銭については、報告書の中で分析を行っている。「無銘銭には内孔が方形のものと円形のものがあり、その割合は68：152である。方形のものは外径は14.2～21.5mm、内孔一辺6.3～11.6mm、厚さ0.5～1.4mmであり、円形のものの外径は10.3～17.4mm、内径7.1～12.9mm、厚さ0.4～1.2mmであり、円形のものが方形のものよりも外径が小さく、厚さも薄い傾向にある。」と記している。



第5図 新斗米館跡出土の無文銭・輪銭

86 下堤C遺跡 秋田市四ツ小屋小阿地字下堤（文献45）

9～10世紀代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、該期の竪穴住居跡31軒、土坑、溝跡等が検出されている。銭貨は8号住居跡の確認面（埋土1層）から「紐で結ばれた状態で」72枚出土した。内訳は開元通寶4、天禧通寶1、皇宋通寶2、嘉祐通寶2、熙寧元寶4、元豐通寶3、元祐通寶1、元符通寶2、大觀通寶3、政和通寶3、正隆元寶1、洪武通寶2、永楽通寶23、宣德通寶2、判読不能19であり、「背文のあるものはない」そうである。

87 大鳥井山遺跡（第1次） 横手市大鳥町（文献46）

後三年の役（1083～87年）で滅亡する清原氏の一族大鳥山太郎頼遠の本拠地と擬定される防御性の極めて強い柵跡である。昭和52年から7次にわたる調査が行われ、二重の土塁・空堀と

柵列で囲まれた内部に掘立柱建物を中心とする建物群等が検出されている。銭貨は外側の空堀（SC2）内、現地表面下1.1mの第8層より「孔を通した紐と共に連珠状に」計53枚出土した。内訳は開元通寶3（うち1枚背：昌）、咸平元寶1、景德元寶2、祥符通寶1、景祐元寶1、皇宋通寶5、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶4、元豐通寶8、元祐通寶4、紹聖元寶4、元符通寶3、政和通寶2、慶元通寶1（背：元）、判読不能12である。なお背に昌の文字が認められる開元通寶は、男鹿市豹が崎例同様、初鑄を845年におく紀地銭あるいは会昌開元と称される銭である。

88 愛宕山 横手市羽黒町（文献47）

昭和51年9月27日、愛宕山中腹の斜面地で小学生2人が土中より容器に入った銭貨を発見した。容器は古伊万里の德利状の小壺（現存高9.8cm）であり、中には慶長一分金（1601年初鑄）が104枚入れられていた。その後10月18日に同じ場所から1枚発見され、計105枚となった。『秋田魁新報』10月1日付には、「出た 金貨がザクザク」との記事が掲載されている。なお銭貨は、昭和52年4月に鑑定・評価が行われ、次のように分類されている。慶長手前吹き（古慶長）17、慶長長花押47、慶長短花押21、慶長大頭光8、慶長小字10、慶長細字2である。出土品は現在、銭貨・容器共に秋田県立博物館に保管・展示されている。

【中世の館跡・集落跡】

100枚以上の一括出土はないものの、中世期の館跡・集落遺跡より銭貨が出土する例は多い。ここでは46遺跡の事例を紹介する。

89 湯瀬館遺跡 鹿角市八幡平字湯瀬古館（文献48）

天正19年（1591）館破却との史料が残る中世館跡である。昭和54年に調査が行われ、掘立柱建物跡、礎石建物、空堀等が検出されている。銭貨は15枚出土しており、遺構内出土の銭貨は全て「館コ」と称される郭面を二分する上面幅8.3m、深さ3.68m、基底幅2.41mの箱葉研状の空堀内（埋土上位）より得られている。ここでは、開元通寶1、元祐通寶1、判読不能あるいは無文6の計8枚出土している。また遺構外は開元通寶1、永樂通寶2、寛永通寶1、判読不能あるいは無文3の計7枚である。判読不能あるいは無文銭9枚のうち8枚は「銭名の削りとりか銭名をつけずに鑄造したもの2者が考えられるが、前者の可能性が高い」と記している。

90 歌内遺跡 鹿角市八幡平字鳥居平（文献49）

平安時代～中世の集落遺跡である。昭和54・55年に調査が実施され、遺構外より銭貨3枚を発見した。天聖元寶、皇宋通寶、寛永通寶各1枚である。

91 長牛城跡（たたら館） 鹿角市八幡平字長牛（文献50）

中世城館長牛城跡の最東端に位置するたたら館は、昭和55年に発掘調査が実施された。舌状

台地の基部には空堀が開削されており、遺構外より元豊通寶が1枚出土した。出土遺物は銭貨以外は古代の土師器であり、古代末の防御集落の可能性はある。

92 妻の神 I 遺跡 鹿角市花輪字妻の神 (文献51)

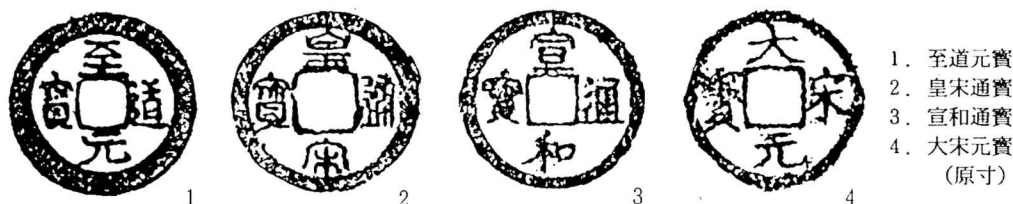
中世乳牛館の一郭を占める遺跡である。昭和55年に調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡、中世の竪穴住居跡(床面に地床炉を有す)等が検出されている。銭貨はS I 006とした中世の竪穴内より3枚出土した。皇宋通寶、元祐通寶、洪武通寶各1枚である。同竪穴では銭貨以外の遺物は出土しなかった。

93 乳牛平遺跡 鹿角市花輪字乳牛平 (文献52)

中世城館である乳牛館に比定される遺跡である。昭和56年に調査が行われ、土塁・空堀で区画された内部(郭面)で竪穴遺構、掘立柱建物跡、焼土遺構等が検出されている。銭貨は遺構外より5枚出土した。内訳は熙寧元寶2、聖宋元寶1、大觀通寶1、判読不能1である。

94 高瀬館跡 鹿角市花輪字堪忍沢 (文献53)

前館、熊館、浦館の3館からなる多郭連続式の中世城館である。昭和61年に熊館第I郭東側先端部分を調査し、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、土坑等を検出した。銭貨は3基の遺構より13枚出土した。SK I 08竪穴遺構では開元通寶、熙寧元寶各1枚、SK 01土坑坑底から皇宋通寶1枚、SK 02土坑では10枚(開元通寶1、至道元寶1、景德元寶1、皇宋通寶2、元豊通寶1、元符通寶1、宣和通寶1、大宋元寶1、景定元寶1)出土している。



第6図 高瀬館跡出土の銭貨

95 小枝指館跡 鹿角市花輪字小枝指館 (文献54—①②)

7あるいは8つの郭から構成される多郭連続式の中近世の城館である。発掘調査は昭和30年(東京大学東洋文化研究所)と平成3年(鹿角市教育委員会)に行われている。

① 昭和30年の調査では、3カ所の館址の遺構内外より、銅銭24枚、鉄銭1枚が出土した。

第2館址では、遺構外より祥符元寶、嘉祐通寶、無文銭が各1枚出土している。

第3館址では、2号住居より皇宋通寶、聖宋元寶、洪武通寶各1と無文銭7枚が、遺構外より、鉄銭1枚、無文銭3枚がそれぞれ出土している。

第4館址では、1号住居より皇宋通寶1、熙寧元寶3、元祐(あるいは元符か)通寶1の計5枚が出土している。同住居は県内では類例の極めて少ない内耳鉄鍋が検出されている。5号住

居で無文銭 1 枚、遺構外でも無文銭 1 枚が出土している。

出土銭貨について報告では、「第四館址の第 1 号住居址において多くの鉄製品や木製品とともに 4 枚の銅銭がその床面に散在の状態で検出されたことで、このことは七館出土の銅銭が明らかに退蔵品ではなく、当時の実用品であったことを示している」と記している。

② 一方、平成 3 年の調査では遺構外より、6 枚の銭貨が出土した。内訳は熙寧元寶 1、元符通寶 2、寛永通寶 3（1 枚は背：波）である。

96 地羅野館跡 鹿角市花輪字地羅野（文献55）

3つの郭から構成される中世館跡である。平成 4 年度に第 I 郭南半部の調査が実施され、堅穴遺構、土坑、空堀などが確認された。銭貨は 2 遺構より各 1 枚出土した。6 号堅穴では床面より判読不能の 1 枚が、19 号土坑では洪武通寶 1 枚である。

なお銭貨の出土した 6 号堅穴は 11 世紀代の堅穴住居を切って構築されている。

97 花輪館跡 鹿角市花輪字中花輪（文献56—①②）

6 以上の郭（本館、北館、南館、ゆるぎ館等）から構成される城館跡である。昭和 58 年と 62 年に調査が行われ、以下に示す 4 地区より計 56 枚の銭貨が出土した。

① 北館では、堅穴遺構、土坑、遺構外より 34 枚出土している。2 号堅穴床面直上では 13 枚（天聖元寶 1、元祐通寶 1、淳熙元寶 1、洪武通寶 3、判読不能 7）、3 号堅穴床面直上では 2 枚（□□元寶、判読不能各 1）、12 号堅穴柱穴内より判読不能 1 枚、17 号堅穴床面より寛永通寶 1 枚、2 号土坑では判読不能 1 枚が確認されている。また遺構外では 10 枚（天聖通寶？1、元祐通寶 1、洪武通寶 1、寛永通寶 6、□□通寶 1）の銭貨が出土した。

南館では遺構外より無文銭 1 枚が出土した。

② 北館南縁の小郭では遺構内外より 20 枚の銭貨が出土した。3 号堅穴のうちの 1 本の柱穴では 15 枚の銭貨がまとまって出土している。内訳は元祐通寶 1、大観通寶 1、嘉泰通寶 1、洪武通寶 8、永樂通寶 3、無文銭 1 である。1 枚の永樂通寶には、紐が結ばれていた。8 号堅穴では天聖元寶 1 枚、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴内では紹聖元寶、判読不能各 1 枚が、遺構外では永樂通寶、寛永通寶が各 1 枚出土している。

ゆるぎ館中ノ郭では寛永通寶が 1 枚出土した。

98 花輪古館跡 鹿角市花輪字古館（文献57）

安保姓花輪氏を代々館主とする中世城館と伝えられる遺跡である。平成 5 年に調査が実施され、明確に館期に位置づけられる遺構の確認はできなかったが、遺構外より景德元寶 1 枚が出土している。

99 小平遺跡 鹿角市花輪字八幡平（文献58）

主に平安時代・中世の集落遺跡である。昭和 52 年に調査が行われ、両時代の堅穴住居跡、堅

穴遺構、掘立柱建物跡等が検出されている。銭貨は、中世期と見られる竪穴遺構床面より1枚、遺構外より破片1枚が出土した。前者は第1号住居跡とした張り出し部を伴う方形の竪穴内より、直径約1.9cmの無文銭が、後者は「通」の文字が認められる銭貨がそれぞれ出土している。

100 黒土館跡 鹿角市花輪字下夕町（文献59）

いわゆる鹿角四十二館の一とされる中世館跡である。平成7年に館跡西側の帯郭部分の調査が行われ、堆積土中より17～18世紀代の陶磁器等と共に銭貨4枚が出土した。元祐通寶、寛永通寶各1、判読不能の鉄銭2である。遺物は鹿角市出土文化財管理センターに保管されている。

101 当麻館跡 鹿角市十和田毛馬内字古館（文献60）

天文5年～慶長13年（1536～1608）にかけて存続した毛馬内氏の居館とされる遺跡であり、毛馬内古館とも称される。昭和63年に調査が行われ、中近世の掘立柱建物跡4棟、竪穴遺構71基、土坑29基などが検出された。銭貨は遺構内47枚、遺構外7枚の計54枚を確認している。

竪穴遺構では71基のうち12基より銭貨が出土している。9号竪穴では6枚（熙寧元寶2、元豐通寶1、□□元寶1、判読不能2）がまとまって出土し、12号竪穴では天聖元寶1枚、16号竪穴3枚（天聖元寶1、皇宋通寶1、判読不能1）、19号竪穴では無文銭1枚、20号竪穴と28号竪穴では洪武通寶各1枚、35号竪穴では皇宋通寶、嘉祐通寶各1枚、50号竪穴床面上より元□□□1枚、51号竪穴では無文銭1枚、62号竪穴では18枚がまとまって出土した。内訳は乾元重寶1、祥符元寶1、皇宋通寶2、嘉祐元寶1、熙寧元寶3、元豐通寶1、淳熙元寶（背：十二）1、洪武通寶2、□□通寶1、□□□寶2、判読不能2、無文銭1である。また64号竪穴では元□通寶1枚、73号竪穴では無文銭2枚が出土している。

第3号掘立柱建物跡では無文銭1枚、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴内より洪武通寶1枚、25号土坑では洪武通寶、無文銭各1枚、2号土坑では判読不能1枚、15号土坑でも判読不能1枚、10号土坑では無文銭2枚、30号土坑でも無文銭1枚がそれぞれ確認されている。

また遺構外では、7枚（元祐通寶1、淳祐元寶（背：七）1、洪武通寶2、判読不能2、無文銭（小型の鳩目銭）1）が出土した。

102 片山館コ遺跡 大館市片山（文献61）

古代・中世・近世初期の集落・館跡である。昭和47年の調査において、第12号とした竪穴遺構内よりまとまって3枚の銭貨が出土した。熙寧元寶、紹聖元寶、大觀通寶各1枚である。同竪穴では、薬壺と思われる陶器、炭化穀物が木器に納められた形で検出されている。銭貨は全て、平成8年4月開館予定の大館郷土博物館に展示予定とのことである。

103 餌釣館跡 大館市餌釣（文献62）

平成6年に大館市教育委員会により調査が行われ、中世の掘立柱建物跡や近世の信仰塚等が検出されている。銭貨は2時期の遺構内より11枚出土した。ここでは中世関係の出土例を紹介

し、近世分については、【近世の城館・塚・神社等】の項でふれる。

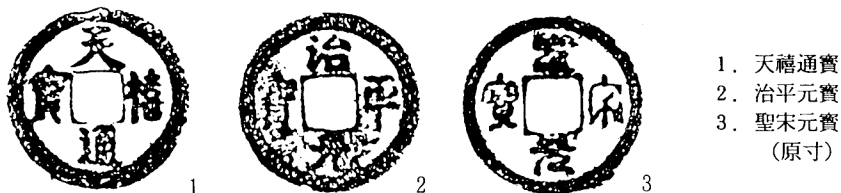
中世では、掘立柱建物跡を構成する柱穴確認面において1枚出土している。紹□元寶である。

104 前田館跡 大館市比内前田（文献63）

舌状台地の先端部に位置する館跡である。昭和53年に調査が行われ、台地基部に幅7～10m、深さ1.5～2mの堀が掘削され、先端の平坦面では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板塀遺構等が検出された。銭貨は堀埋土中より元祐通寶が1枚出土した。同堀内では多量の板状木片、緑釉段皿、珠洲系播鉢、管状鉄製品等も発見されている。報告では、同館を「前田地域の中心地をなす前田氏の居館跡であった」と結論づけている。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

105 谷地中館遺跡 比内町谷地中字館（文献64）

独立残丘上に立地する中世館跡である。昭和46年から3次にわたる調査が行われ、竪穴遺構、土坑、柱穴列等が検出されている。銭貨は第1次調査で3枚、昭和51年の第3次調査でも3枚出土している。前者は遺構外出土で元豊通寶、政和通寶、判読不能各1枚である。後者は出土位置の記述はないが、天禧通寶、治平元寶、聖宋元寶各1枚の拓影図が載せられている。



第7図 谷地中館跡出土の銭貨

106 大日堂前遺跡 比内町独鉦字大日堂前（文献65）

中世浅利氏と関連の深い館跡と考えられる遺跡である。昭和55年に調査が行われ、遺構外より治平通寶1枚、寛永通寶14枚が出土している。調査区は大日堂という神社境内であり、出土した寛永通寶は、この神社に由来するものと想定される。

107 真館跡 比内町新館字真館（文献66）

古代～中世の集落跡・館跡である。昭和47年に調査が行われ、次年に刊行された報告書の記載によると「発掘区内北半竪穴床面」より皇宋通寶1枚が出土したとある。拓影図、写真等なく、詳細は不明である。

108 脇神館跡 北秋田郡鷹巣町脇神字タタラノ沢

舌状台地先端部に立地する連郭式の館跡である。平成7年に遺跡範囲確認調査が行われ、遺構外出土より銭貨1枚出土した。判読不能である。遺物は秋田県埋蔵文化財センターに保管している。

109 竜毛沢館跡 ニツ井町切石字竜毛沢（文献67）

3つの郭からなる中世城館である。昭和63年に調査が行われ、主に14世紀代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、これら施設を区画する柵列（板塀）、空堀等が検出されている。銭貨は、S B02とした本館跡最大規模の建物を構成する柱穴内埋土上位で4枚出土した。内訳は開元通寶、元□通寶（順読）、□元通寶（対読）、判読不能各1枚である。なお本建物は書院造系統の建物となるようである。

110 蝦夷館跡 峰浜村目名潟字竹長根（文献68）

西に日本海を望む舌状台地先端部に立地する館跡である。台地基部には長さ70m、幅5～6m、深さ2～3mの空堀が3条認められる。昭和39年に発掘調査が行われ、建物や柵列を構成すると考えられる柱穴等が検出され、土師器、須恵器、青磁、白磁、黄瀬戸、染付等と共に判読不能の銭貨が1枚出土している。

111 金山館跡 能代市向能代字平影野（文献69）

米代川河口域右岸の独立丘上に立地する館跡である。昭和59・60年に調査が行われ、弥生・古代・中世・近世のある時期に使用された複合遺跡であることが判明した。銭貨は遺構外より21枚出土した。銭名の判読できたものは景德元寶、寛永通寶各1枚である。

112 館の上館遺跡 八竜町鶴川字館の上（文献70）

4つの郭面からなる中世城館である。平成4年に第1郭帯郭の一部を調査し、遺構外より銭貨3枚が発見された。内訳は皇宋通寶、宣和通寶、文久永寶各1枚である。

113 扇田谷地遺跡 八竜町鶴川字扇田谷地

古代～中世にかけての集落遺跡である。平成7年に発掘調査が実施され、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄炉等が検出されている。銭貨は中世期と推定される竪穴遺構より、22枚錆着して出土した。いずれも火熱を受け脆弱である。銭種の判明しているのは次の11枚である。宋通元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶1、至和元寶1、元豊通寶2、元祐通寶2、元祐通寶か1、紹聖元寶1、政和通寶1である。遺物は秋田県埋蔵文化財センターで保管している。

114 一向遺跡 男鹿市船越字一向（文献71）

江戸時代より井戸跡、陶磁器類等が出土し、中世～近世初頭頃まで存続していた集落跡と周知される遺跡である。昭和38年には八郎潟干拓事業に伴う新水道工事により16基の井戸跡等が検出され、同年3月29日付け『朝日新聞（秋田版）』には、「四百年前の集落跡みつかるとの見出しで記事が掲載されている。その後、昭和40年に磯村朝次郎氏が同地において現存する井戸跡8基を確認し、井戸内部及びその周辺から木器、陶器等と共に10枚程の銭貨を採集されている。銭種の記載はない。

115 勅使館跡 秋田市寺内字勅使館（文献72）

秋田城跡の位置する高清水丘陵の南西端を占地する館跡である。秋田城跡及びその周辺区域

は、昭和34年から4ケ年にわたり文化財保護委員会（現文化庁）による調査が行われており、勅使館地区も昭和36年第3次調査においてその対象となった。銭貨は館の周囲に巡らされている土塁盛土中より出土した。枚数、銭名等の記載はない。

116 後城遺跡 B・C 区 秋田市寺内字後城（文献73）

秋田城跡の西約500mに位置する古代～中世の集落遺跡である。昭和53年に調査が行われ、3地区（昭和52年分布調査出土を含む）より銭貨162枚が出土している。ここでは土坑や井戸跡等から銭貨が出土したB・C区と、中世墓を検出したA区に分けて記述する。

B区では、SX043（東西約15m、南北約12.5m、深さ約5.5mの円形、擂鉢状を呈する遺構）より、多量の木製品、陶磁器類、鉄製品、犬骨3頭分、馬頭骨等と共に25枚の銭貨も出土している。内訳は開元通寶2、咸平元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶4、至和通寶1、治平通寶1、熙寧元寶1、元豐通寶3、元祐通寶1、紹聖元寶3、聖宋元寶1、洪武通寶4、永樂通寶1、宣徳通寶1である。SX043は、溜池と想定されている。

C区では遺構内外より計96枚の銭貨が出土した。遺構内ではSE052より開元通寶（背：人）、SE054上面土坑より開元通寶（背：一）、SE051より治平元寶、SE054より熙寧元寶、SK059より聖宋元寶、至大通寶、SE055より洪武通寶、SE052より永樂通寶各々1枚出土している。遺構外では開元通寶4、至道元寶1、祥符元寶5、祥符通寶1、天禧通寶1、天聖元寶5、皇宋通寶9、至和元寶1、治平通寶1、熙寧元寶7、元豐通寶8、元祐通寶3、紹聖元寶1、聖宋元寶3、大觀通寶1、政和通寶1、淳熙元寶1（背：十五）、嘉定通寶1、洪武通寶8、永樂通寶7、朝鮮通寶2、寛永通寶2、判読不能15が出土した。

また、昭和52年の分布調査では、13枚の銭貨が得られている。開元通寶2、治平元寶1、熙寧元寶1、元祐通寶2、洪武通寶1、永樂通寶2、無文銭1、判読不能3である。

117 下夕野遺跡 秋田市川尻字下夕野（文献74）

13世紀を中心とする集落遺跡であり、標高5m程の微高地に立地する。昭和52年に調査が行われ、井戸跡（SE8）より銭貨1枚（銭種不明）が出土した。「直径2.15cm、方孔一辺0.79cmを測り、比較的小ぶりな」銭貨である。

118 岩城館跡 秋田市下新城岩城字下向（文献75）

貞和年間（1345～49）新城氏の居館であったと伝えられる館跡である。開元通寶が1枚採集されている。

119 白根館跡 雄和町平沢字水沢（文献9）

昭和44年春頃、水沢地内を整地中に地下約30cmより銭貨が出土したようである。詳細は不明であるが、『秋田県の中世城館』には、「館からは焼米、刃物、黄瀬戸片、美濃焼片、珠洲焼片、古銭等が出土している」との記載がある。

120 浜館遺跡 西目町出戸字館（文献76）

由利仲八郎政春の居館（1291～1312年）跡と周知される館跡である。昭和50年に調査が行われており、建物を構成すると考えられる柱穴が数多く検出された。銭貨はいずれも遺構外より5枚出土した。皇宋通寶、元祐通寶、政和通寶、洪武通寶、判読不能各1枚である。

121 履沢館跡 矢島町立石字沢の内（文献9）

由利十二頭の一である大井氏の家臣履沢氏の居館とされる遺跡である。『秋田県の中世城館』によると「附近開畑の際、陶片、古銭（宋銭）、鉄砲の玉等が出土」と記されているが、詳細は不明である。

122 金沢柵跡 横手市金沢中野（文献77）

後三年の役（1083～87年）で最後の戦場となった柵跡として周知される遺跡である。昭和39年より5次にわたる調査が行われ、掘立柱建物跡、空堀等が検出されている。これら遺構と出土遺物から判断しても、史上に登場する金沢柵であったとする確証は得られていない。銭貨は、本丸表土層より開禧通寶が1枚出土している。

123 手取清水遺跡 横手市清水町新田字手取清水（文献78）

弥生時代の遺跡として周知されており、昭和62年に調査が実施されている。この結果、縄文～近世の複合遺跡であることが判明した。銭貨は調査区内で検出された旧河川より7枚出土した。内訳は熙寧元寶1、大観通寶1、寛永通寶2、寛永通寶か1、文久永寶か1、判読不能1である。

124 馬鞍館跡 平鹿町醍醐字馬鞍（文献79）

小野寺氏が平鹿郡進出の最初の拠点の1つとされる館跡である。『平鹿町史』によると、「北の郭と西の郭の間の果樹園を開墾した際に焼米や炭化材及び礎石に使用したと思われるような礫とともに古銭貨が出土し」ている。出土量は明らかではないが、同町史には、開元通寶、政和通寶、洪武通寶、永樂通寶各1、判読不能2の計6枚の銭貨拓影が載せられている。

125 鉢山館跡 大森町猿田字鉢山下り（文献13）

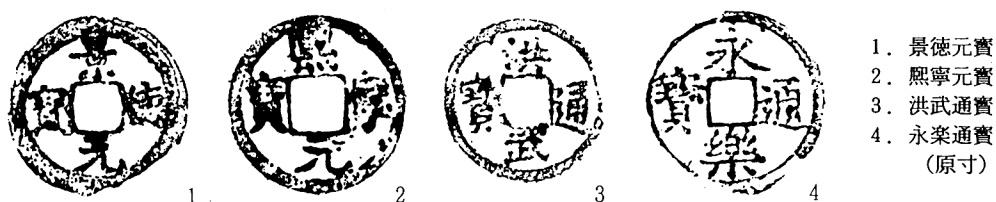
『秋田県遺跡地図（県南版）』には、本遺跡は館跡として周知され、「井戸、古鏡、古銭等出土」と記されている。詳細は不明である。

126 稲庭城跡 稲川町古館（文献80）

中世小野寺氏の居城とされる遺跡である。昭和61年二ノ丸部分の調査が行われ、掘立柱建物跡、石垣状遺構、土坑等が検出されている。銭貨は遺構外より13枚出土した。内訳は、太平通寶、至道元寶、皇宋通寶、元豊通寶（丸孔）、皇宋元寶各1及び寛永通寶7、判読不能1である。なお寛永通寶については、報告で1枚は寛文8年江戸所鑄銭、2枚は元文紀伊中之島所鑄銭、残りは元文出羽秋田所鑄銭と思われるとの記載がある。

127 鶴沼城跡 雄勝町桑ヶ崎字平城（文献81）

中世～江戸中期の城館・集落跡である。昭和54年の調査において、掘立柱建物跡59棟、井戸跡68基、土坑等が検出されている。遺構内外より21枚の銭貨が出土した。遺構内では井戸跡（S E 72）及び溝跡（S D 212）より寛永通寶（背：文）が各1枚、遺構外では開元通寶1、景德元寶1、皇宋通寶2、治平通寶1、熙寧元寶1、紹聖元寶1、洪武通寶1、永樂通寶2、寛永通寶9、無文銭1が出土している。うち5枚（開元、景德、皇宋、熙寧、永樂各1）は重なって出土しており、紐で結んでいた痕跡が残る。



第8図 鶴沼城跡出土の銭貨

128 福田遺跡 能代市浅内字福田上野（文献82）

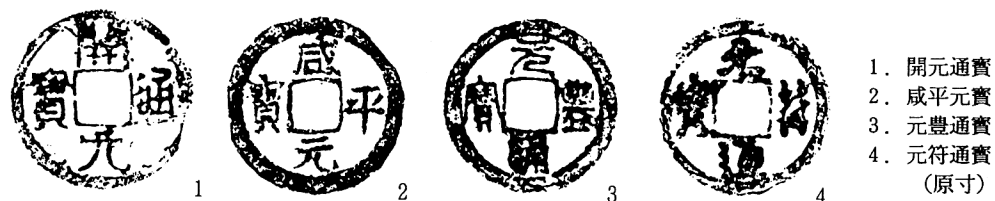
主に9世紀代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、これら施設を区画する溝、柱穴列等が検出されている。銭貨は遺構外より2枚出土した。洪武通寶、錆のため銭名の有無不明な鉄銭各1枚である。

129 小谷地遺跡 男鹿市脇本富永字小谷地（文献83）

標高12m程の沖積面に立地し、古墳時代（5世紀代）と平安時代の埋没家屋を検出したことで周知される。発掘調査は昭和39年から4次にわたり実施されているが、銭貨は本調査以前に得られた資料である。祥符元寶1枚が報告されている。

130 片符沢遺跡 東由利町田代字石高（文献84）

主に縄文時代の遺跡として周知される。昭和54年に調査が行われ、遺構外より銭貨10枚が出土している。報告書には銭種等の記載はなく、新たに秋田県埋蔵文化財センターに保管されている銭貨を判読した。開元通寶2、咸平元寶1、元豐通寶1、元符通寶1、寛永通寶4（うち1枚は背：波）、判読不能1である。



第9図 片符沢遺跡出土の銭貨

131 カウヤ遺跡 象潟町小砂川字カウヤ (文献85)

秋田県南西隅に位置し、日本海汀線まで200m程の海成段丘上に立地する。昭和59・60年に調査が行われ、県内では検出例の少ない製塩関係の遺構が確認されている。昭和59年には遺構外より寛永通寶1枚が出土している。翌年には、溝跡より12枚、遺構外4枚の計16枚の銭貨が出土した。S D05とした溝跡は、底面出土の土器類から8世紀後半に構築されたようであるが、銭貨は「溝確認面のやや下から銅銭12枚が重って一括出土」した。内訳は元聖元寶1、皇宋通寶2、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶2、元豐通寶2、元祐通寶1、大觀通寶1、永樂通寶1である。また遺構外では、元豐通寶、紹聖元寶、寛永通寶、判読不能各1枚を確認している。

132 百目木遺跡 仙北町板見内字百目木 (文献13)

『秋田県遺跡地図 (県南版)』によると、本遺跡では元豐通寶出土と記載されている。

133 仁瀬沢遺跡 西木村西明寺字松木台 (文献86)

『西木村郷土史資料』によると、昭和32年佐藤正作氏の調査として、仁瀬沢で石鏃、石小刀、古銭 (洪武通寶外) 出土と記されている。

134 羽後病院敷地遺跡 羽後町西馬音内字大戸道 (文献87)

主に平安時代の遺物散布地である。平成5年に調査が行われ、C トレンチ1区第2層より至大通寶1枚が出土した。

【中世の墓・塚】

本項では中世墓出土4例、塚出土2例を収める。

135 妻の神Ⅲ遺跡 鹿角市花輪字妻の神 (文献88)

中世城館乳牛館の一郭を占めると推定される遺跡である。昭和56年に調査が実施され、掘立柱建物跡、張り出しを持つ方形竪穴遺構、焼土遺構、土坑、土坑墓、柵列などが検出されている。銭貨は竪穴遺構、土坑墓、遺構外より26枚出土している。

竪穴遺構では、S I 05より6枚 (咸平元寶1、治平元寶2、永樂通寶1、判読不能2)、S I 15床面より皇宋通寶1枚、S I 38より治平元寶1枚が出土している。

また人骨等の遺存から土坑墓と判断された遺構は3基あり、その3基の土坑から13枚の銭貨が出土している。SK (S) 53では、「2枚の小さい円形の柁目の板の間に・・・ (銭貨) 6枚が挟みこまれ、両手の手のひらで持たせたかのような状態で出土している」。銭種は皇宋通寶1、嘉祐通寶1、聖宋元寶1、判読不能3である。SK (S) 54では、「骨盤のあたりから1枚出土して」いるが、銭種は判読不能である。SK (S) 57では、坑底北東部で6枚の銭貨が出土している。銭種は景德元寶1、治平元寶1、元豐通寶1、洪武通寶2 (1枚の背：浙)、判読不能1である。なおSK (S) 53・54は、頭部を北にし、体の右側を下にした側臥屈葬人骨が検出さ

れている。

遺構外では、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、元□□寶（元豐通寶か）、判読不能各1枚が出土している。

136 秋田城跡鶴ノ木地区 秋田市寺内字鶴ノ木（文献89—①～⑥）

高清水丘と称される標高50m程の独立丘陵上に立地する古代城柵遺跡である。8世紀前半～10世紀後半にかけて存続したと考えられる。昭和47年より秋田城跡調査事務所が継続的に調査を行っている。

本城跡では11箇所の調査区より、計95枚の銭貨が出土している。これを銭種、遺構から大別すると、秋田城が機能を果たしていた古代に属する皇朝銭出土地（遺構）、中世墓を検出している鶴ノ木地区、その他の主に近世日本銭出土地域とすることができる。ここでは中世墓出土銭が見られる鶴ノ木地区についてまとめる。

① 昭和48年第10次調査において、10基の土坑墓が検出され、2基には頭蓋骨、骨片と共に銭貨が副葬されていた。2号墓坑では、6枚が錆着して出土しており、内訳は永樂通寶2、洪武通寶1、判読不能3であった。3号墓坑では4枚（大□通寶、□寧元寶各1、判読不能2）出土している。これら墓坑を報告では、「副葬銭から中世末から近世にかけてのもの」と考えている。その他遺構外でも、宋通元寶1、元祐通寶2、政和通寶1、洪武通寶2、寛永通寶2、判読不能2の計10枚が出土している。

② 昭和54年第26次調査において、S K 445（長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4mの楕円形の土坑）埋土中より6枚の銭貨が出土した。内訳は天禧通寶1、元豐通寶2、洪武通寶1、銭種不明2である。報告では「中世以降の墓坑と考えられる」としている。

③ 昭和57年第35次調査では、11基の墓坑が検出され、うち6基より副葬と見られる銭貨が39枚出土している。

S T 627（長軸1.62m、短軸0.6mの長楕円形）では埋土に、大量の炭化物に混じって骨片が検出され、角形の鉄釘6本と共に11枚の銭貨が出土した。咸平元寶1、元豐通寶1、嘉定通寶1、洪武通寶2、永樂通寶1、判読不能5である。

S T 628（長軸1.45m、短軸0.45mの長楕円形）では坑内より3枚の銭貨が出土した。熙寧元寶、政和通寶、無文銭各1枚である。

S T 629（長軸1.32m、短軸0.55mの長楕円形）では坑内より7枚の銭貨が出土した。祥符元寶2、祥符通寶1、熙寧元寶1、聖宋元寶1、淳祐元寶1、銭種不明1である。

S T 635（長軸1.55m、短軸0.36mの長楕円形）では埋土に炭化材・物が充填しており、無文銭が6枚出土した。「うち3枚には布地の炭化したものと考えられる付着物が認められる」。銭貨は外径18mm、方孔を有する。

S T 653 (長軸1.55m以上、短軸1mの長楕円形)では坑内より3枚の銭貨が出土した。洪武通寶1、銭種不明2である。

S T 656 (径約0.5mの円形)では坑内より9枚の銭貨が出土した。開元通寶2、天聖元寶2、熙寧元寶1、聖宋元寶3、銭種不明1である。

墓坑の他、S A 652ピット群内より銭貨4枚(咸平元寶、皇宋通寶、元豐通寶、嘉定通寶)が出土している。

墓坑については、「副葬銭として開元通寶から永樂通寶までが出土するが寛永通寶が出土しないことから、近世以前の遺構と考え」ている。

④ 昭和60年第42次調査において、墓坑内(ST810)より3枚の銭貨が出土した。銭種は不明である。S T 810は、長軸1.6m、短軸1mの楕円形を呈しており、5cm厚の炭化物の充填層が認められ、骨片も検出されている。

⑤ 一方、墓出土ではないが、同じ鶴ノ木地区において、鉄銭も出土している。平成4年第58次調査(寺内字鶴ノ木)において、S A 1142布掘り溝底面より鉄銭1枚が出土した。この溝跡は「鶴ノ木地区南部の堂風の建物(第30次調査検出)を中心に、一帯を東西約57～69mの範囲で区画する区画施設・材木塀(柱列塀)」であることが判明した。

⑥ また、中世銭は昭和55年第28次調査(字大畑)においても、3枚確認されている。天聖元寶、至和通寶、元豐通寶各1枚である。

137 後城遺跡A区 秋田市寺内字後城(文献73)

A区では土坑墓21基のうち6基より15枚の銭貨が出土した。

S T 002 (南北1m、東西0.93mの円形)では、骨片と共に元祐通寶2枚出土している。

S T 006 (長径1.16m、短径0.9mの楕円形)では、「底面についた状態で多量の礫が入って・・・覆土中には焼土、骨片が多量に認められる」。銭貨は開元通寶、皇宋通寶、嘉祐通寶各1枚出土している。

S T 008 (東西0.94m、南北0.82mの円形)では、焼土、炭化材、骨片が多量に認められ、祥符通寶、元祐通寶各1枚が出土している。

S T 009 (長径1.56m、短径1mの楕円形)では、「覆土には特に多量の礫を含み、焼土、炭化材が混入して」おり、骨片、歯も認められ、皇宋通寶1枚が出土している。

S T 013 (東西0.72m、南北0.64mの円形)では多量の骨片と共に元豐通寶1枚が出土している。

S T 015 (長径1.5m、短径0.92mの楕円形)では、炭化物、骨片が多量に認められ、これらと共に銭貨6枚が出土している。熙寧元寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶各1枚、洪武通寶2枚である。

その他、S X042とした落ち込み内より、天聖元寶、皇宋通寶、元祐通寶各1枚が出土している。またA区遺構外でも開元通寶2、元祐通寶2、政和通寶4、洪武通寶1、永樂通寶1の銭貨10枚が出土した。

138 待入Ⅲ遺跡（Ⅲ区） 秋田市金足片田字待入（文献90）

主に中世の城館、墓地として周知される遺跡である。平成3年発掘調査が実施され、2地区から銭貨が出土した。ここでは火葬墓が検出されたⅢ区について報告し、寛永通寶が出土したⅠ区は、【近世の城館・塚・神社等】の項で紹介する。

Ⅲ区では東向き斜面の中腹部に立地する火葬墓群より銭貨が出土している。検出された19基のうち、3基の墓跡から計4枚の銭貨が発見された。

第6号火葬墓（長径78cm、短径48cmの楕円形）は、「埋土中には骨片が混在しており、底面よりやや浮いた状態で」政和通寶と銭種不明の銭貨2枚が重なって出土した。

第8号火葬墓（長径63cm、短径54cmの楕円形）は、「東寄りの底面よりやや浮いた状態で銅銭（文字不明）が出土した。骨片は量が多く、底面西側にまとまっていた」。

第11号火葬墓（径20cmの円形）は、「底面で銅銭（文字不明）が出土した」。

139 貝沢拾三本塚 羽後町貝沢字拾三本塚（文献91—①②）

13基の塚が一行に並び、いわゆる十三塚である。明治以降に破壊や盗掘にあい、現存するのは1基（7号墳）のみである。銭貨が出土した塚は次の4基のようである。

① 9号墳は、昭和27年に盗掘され、以下の遺物が伝えられている。一字一石経、金小片（方形、重量3.2g）、銭貨32枚である。これらは「墳中に少し大きい自然石があり、その下」から出土したもののようである。銭貨は咸平元寶2、天禧通寶1、景祐元寶1、皇宋通寶5、治平元寶2、元豐通寶1、元祐通寶3、政和通寶5、宣和通寶3、紹熙元寶1、天□通寶3、□元通寶1、判読不能4である。

10号墳は、径7～7.2m、高さ1.22mの円丘状の塚である。昭和35年調査が行われ、墳丘内から477個の一字一石経と共に13枚の銭貨が出土した。銭貨は「出土したとき3、4枚ずつ固着しており、その中の1片に人骨細片が付着していた。新潟大学小片保教授の鑑定によれば火葬骨である」ことが判明している。銭貨は、開元通寶1、景德元寶1、天聖元寶3、皇宋通寶1、熙寧元寶1、元豐通寶3、元祐通寶1、聖宋元寶1、大觀通寶1である。

② 11号墳は、昭和25～28年頃までに盗掘され、宋銭、切遣いの譲葉金（方形、重さ2.8g）、経石が出土したようである。

12号墳は、昭和27年に盗掘され、宋銭13枚、切遣遣いの譲葉金（方形、重さ2.3g）、経石多数が出土したようである。

140 松岡経塚 湯沢市松岡字坊中（文献92）

長径5.7m、短径4.5mの楕円形を呈し、葺石で覆われた塚である。昭和29年偶然に発見され、内部より寿永3年(1184)と建久7年(1196)銘の入る銅製経筒2組、刀子、土師器壺、須恵器甕などと共に洪武通寶が1枚出土した。出土の位置、状況は不明である。

【皇朝銭出土地】

日本銭のうち古代に铸造されたいわゆる皇朝十二銭は、県内では5遺跡より15枚確認されている。このうち、六郷町安楽寺跡で富壽神寶1枚、鳥海町大久保では大量の渡来銭に混じって和同開珎が1枚出土していることは前述のとおりであり、ここでは皇朝銭が単独で出土した例を紹介する。いずれも秋田市内に所在する遺跡である。

141 湯ノ沢F遺跡 秋田市四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢(文献93)

9世紀後葉に営まれたと推定される土坑墓群が発見された遺跡である。昭和58年から2次にわたる調査が行われ、東西63m、南北36mの楕円形の範囲より40基の土坑墓が検出されている。銭貨は16号土坑墓より隆平永寶(初鑄796年)が1枚出土した。同墓は長さ3.64m、幅1.06mの隅丸長方形を呈し、銭貨の他に土師器坏、砥石、鉄刀、鉄鏃、鎌、鋤先、銅製帯金具など多種多様な遺物が副葬されていた。

142 潟向I遺跡 秋田市金足小泉字潟向(文献94)

昭和45年4月19日、金足小泉に所在する男潟の西潟岸砂丘台地から和同開珎3枚が重なった状態で発見された。銭貨は地表下約30cmのところから須恵器片と共に出土したそうである。同遺跡では、昭和48年と58年に平安時代の火葬墓が7基発見・検出されている。いずれも土師器甕あるいは壺を骨蔵器としており、土師器坏を蓋としている例が多い。出土銭との関係は不明である。

143 秋田城跡 秋田市寺内(文献95-①～⑤)

最北の古代城柵官衙遺跡として周知される秋田城跡では、5地区より3種類9枚の皇朝銭が出土している。

① 昭和52年第21次調査(字焼山)において、S I 306住居跡床面より、和同開珎が1枚出土した。「きわめて遺存状態の良好な貨幣である。銅銭であり、計測値は径25.1mm、厚さ1.45mm、内径6.3mm、重量1.7357g」である。共伴遺物は、土師器(甕)、須恵器(坏、蓋)、瓦、砥石、刀子などがある。

② 昭和55年第28次調査(字大畑)において、富壽神寶が1枚出土した。出土位置は、明治元年前後に盛土された攪乱層内出土である。

③ 平成2年第54次調査(字鶴ノ木)において、S I 1051竪穴住居跡埋土より和銅開珎1枚出土した。銭貨の「遺存状況はあまり良くない」。

- ④ 平成5年第60次調査（字大畑）において、須恵器短頸壺に入れられた萬年通寶5枚が出土した。「古銭の表面には、腐食した布目が認められることから、底面に5枚並べた上に布にくるんだ胞衣を納めたもの」と考えられ、いわゆる胞衣壺に銭貨を埋納した例である。壺は須恵器の蓋がきっちりと被せられており、径40cm程の小土坑（S X 1305）に納められていた。土器の年代は8世紀後半と報告されている。なお壺内の胞衣（胎盤）の残存物を血液鑑定したところ、胎盤は男の胎児のものであり、血液型はB型であることが明らかとなっている。
- ⑤ 平成6年第62次調査（字鷲ノ木）において、旧耕作土内、地表下約50cmの位置より和同開珎銀銭が1枚単独で出土した。銭貨出土地点は、秋田城外郭東門から城外に延びる推定大路の南側にあたる。銀銭の組成は、銀97.7%、銅1.4%、鉛0.9%である。

【近世の館跡・塚・神社跡等】

本項目では、近世の館跡1例、塚出土5例6基、土坑出土2例、神社等推定地出土4例であり、銭名の明らかなものは全て寛永通寶であった。

144 柏崎館跡 鹿角市十和田毛馬内字柏崎（文献96）

慶長12年（1607）前後に築造された毛馬内氏の居館跡とされる。昭和62・63年に調査が実施され、館期の遺構は検出されなかったものの、近世の陶磁器と銭貨5枚が出土した。銭貨はいずれも寛永通寶である。

145 餌釣館跡 大館市餌釣（文献62）

平成6年に調査が行われ、近世期では、塚や溝跡から10枚の寛永通寶が出土した。内訳は、塚S X 01（南北5.3m、東西4.8m、高さ0.83mの方形）マウンド表土中1枚、同塚構築に伴う掘削溝埋土上位より2枚、塚S X 02（南北6.6m、東西5.9m、高さ0.82mの楕円形）マウンド表土中6枚、近現代の道路側溝と推定される溝埋土中1枚である。塚では、銭貨以外の遺物の共伴は認められなかった。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

146 中野円墳状遺構 比内町中野（文献97）

東西約4.2m、南北約4m、高さ約1m、墳頂部に長さ1mを越す巨石2個を乗せている円墳状の遺構である。昭和47年に調査が行われ、主体部等の掘り込み施設は検出できなかったが、円墳状遺構の中央部、盛土中位層より寛永通寶10枚が固結した状態で出土した。うち2枚の背には、文、元の文字が認められる。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

147 上岩瀬 田代町岩瀬字上岩瀬塚ノ岱

平成6年5月24日、上岩瀬のスポーツ公園事業工事中に、寛永通寶が5枚発見された。これを受けて同地点を11月に発掘調査を行い、銭貨が出土したのは直径約3m、高さ約1.5mの塚であることが確認された。銭貨は塚の頂部から「深さ80cm位を掘ったところで、約40個の組石が

あり、その組石の中央に置かれていた」そうである。銭貨以外の遺物には、小型の錫杖、小刀の一部、瑪瑙質の丸石等がある。出土銭の記事は『北羽新報』12月3日付にも載せられている。本例は、田代町教育委員会の近藤佳成氏より教示いただいた。

148 一ツ森遺跡 秋田市楡山金照町（文献98）

近世の塚（報告では墳丘状盛り土）である。昭和50年に調査が行われ、塚は「全長13.5m、頂部は南側にあり、径8m、高さ1mの高まりをなし、更に北側には巾5.3m、高さ30～50cmの舌状の高まりが伸びている。」ことが確認された。盛土は、版築状に「固くつき固められて」おり、掘り込み等の主体部は確認できなかったが、盛土内から寛永通寶11枚、江戸初期の唐津焼の小皿、江戸中頃の七輪の小片が出土した。

149 富ヶ沢4号塚 横手市赤坂字富ヶ沢（文献99）

丘陵頂部に位置する近世の塚である。その規模は基底部での長さ11.75m、幅6.3m、高さ0.2～0.5mのくびれ部のない前方後円墳に似た平面形を示す。平成2年に調査が行われ、表土あるいは盛土1層中より11枚の寛永通寶が出土した。報告では塚の性格を「江戸時代に構築された「地境」、もしくは信仰のための塚である可能性が高い」と考えている。

150 久保田城跡 秋田市千秋公園（文献100）

慶長8年（1603）から翌9年にかけて築城された秋田藩主佐竹氏の居城である。昭和63年に本丸北西隅の御隅櫓跡の発掘調査が行われ、1号土坑より寛永通寶1枚が出土した。報告では、同土坑は大量に出土した瓦の年代より「明治10年前後の御隅櫓解体時に伴う瓦等を廃棄した遺構」の可能性を指摘している。

151 秋田城跡鶴ノ木地区 秋田市寺内字鶴ノ木（文献89—③）

昭和57年第35次調査では、銭貨の副葬された中世の墓坑等が検出されているが、近世の土坑（S K 648）埋土中でも寛永通寶1枚が確認されている。

152 待入Ⅲ遺跡Ⅰ区 秋田市金足片田字待入（文献90）

本遺跡Ⅰ区では、丘の頂上部より銭貨13枚が出土している。全て遺構外出土である。うち12枚は寛永通寶であり、4枚の背には、文、元、波文が見られる（1枚判読不能）。

これら銭貨が出土した地点には、かつて金比羅神社が座しており、この神社に由来する銭と見られる。

153 払田柵跡 仙北町払田、千畑町本堂城回（文献101—①②）

9世紀初頭に創建された古代城柵遺跡である。11世紀初頭にはその機能を停止しているようである。その後、この地には天文年間（16世紀前半）に、堀田氏の居城があったとの記録も残り、真山地区には土塁・空堀も現存している。

① 昭和53年第13次調査（払田字長森）において、杉の抜根跡（S X 271）より寛永通寶が1枚

出土した。報告では、「菅江真澄の「月の出羽路」に記載されている八幡神社がほぼこの付近に鎮座していて、この鎮守を中心に杉の大き木が茂り、S X 265・270・271は杉の抜根跡である。」とされることから、出土銭貨はこの八幡神社に由来するものと推定できる。なお、同神社は大正5年に高梨神社に合祀されている。

② また昭和56年第43次調査（払田字館前）において、遺構外より寛永通寶7枚（背：波、元各1枚）が出土した。

154 岩清水遺跡 大森町上溝字岩清水（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』には、本遺跡は「種別宗教遺跡、遺物に寛永通寶（神社跡と推定）」とある。詳細は不明である。

155 柏原古墳群 羽後町大久保字柏原（文献102）

8世紀中葉から10世紀前半代の古墳群として周知される。昭和60年より詳細分布調査が実施され、64基の古墳の存在が確認されている。銭貨は平成4年の調査において、遺構外より6枚の寛永通寶が出土した。報告では、銭貨は「稲荷社の小祠があり、この小祠に伴うものであろうか」としている。

【その他の出土地】

ここでは近世日本銭が遺構外より出土している例、銭種が不明な例をまとめた。

156 北の林Ⅰ遺跡 鹿角市八幡平字北の林（文献103）

平安時代の集落遺跡である。昭和55年に調査が行われ、寛永通寶2枚（1枚は背：波）が採集されている。

157 玉林寺跡 大館市茂内字鬼ヶ台（文献104）

中世末に存在していたと伝えられる寺跡である。昭和60年に調査が行われ、伽藍等の建物の検出はなかったものの、地蔵菩薩蔵や立石（標石）を伴う土坑等が確認されている。銭貨は遺構外（表土下）より寛永通寶1枚が出土した。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

158 本宮上ノ山遺跡 大館市本宮字上ノ山（文献105）

縄文・平安・中世・近世の散布地・城館である。大館市が発行した『遺跡詳細分布調査報告書』によると、縄文土器、土師器と共に寛永通寶が採集されている。

159 湯ノ沢岱遺跡 峰浜村水沢字湯ノ沢岱

主に10世紀代の集落遺跡である。平成7年の調査において、表土層より寛永通寶が2枚出土した。この時期の遺構は検出されていないが、同期の遺物として煙管が1点出土している。遺物は秋田県埋蔵文化財センターで保管してある。

160 萱刈沢Ⅰ遺跡 八竜町鶴川字萱刈沢（文献106）

縄文時代・平安時代の集落遺跡である。平成3年に調査が行われ表土層より、寛永通寶が1枚出土した。

161 延命寺台遺跡 男鹿市脇本富永宇延命寺台（文献107）

縄文・弥生・平安・近世の複合遺跡である。昭和59年に調査が行われ、遺構外より銭貨2枚が出土している。1枚は寛永通寶である。

162 南平沢 男鹿市船川港南平沢（文献27）

磯村・小早「男鹿半島出土の古銭」によると、「昭和40年代県道改修工事中南平沢大宮」より銭貨が出土したようであるが、詳細は不明である。

163 多多羅 五城目町久保宇多多羅（文献108）

『新編・秋田の地名』によると、昭和40年に「銅冶座跡を発掘したところ、鉄滓・銅古銭が多量にでた」ようであるが、詳細は不明である。

164 蒲沼遺跡 八郎潟町蒲沼（文献109）

平安時代と近世の遺物散布地である。昭和56年に調査が行われ、寛永通寶1枚が出土している。出土している陶磁器類は16世紀後半～17世紀初め頃を主体とするようである。

165 片野Ⅰ遺跡 秋田市上新城中字片野（文献110）

主に縄文時代と平安時代の小規模な集落跡として周知される遺跡である。平成4年から3年にわたり調査が行われ、遺構外より寛永通寶（背：波）1枚が出土した。

166 秋田城跡 秋田市寺内（文献111—①～③）

秋田城跡では中世以降も人々の営みは絶えることなく続いており、少量ながら近世日本銭が発見されている。

① 昭和55年第28次調査（字大畑）では、寛永通寶3枚が出土している。

② 昭和57年第36次調査（字大畑）でも表土層より3枚、整地層より1枚の寛永通寶が出土している。①②とも護国神社境内に位置する。

③ 昭和62年第47次調査（字大小路）では、表土層より文久永寶が2枚（背：波）出土した。

167 上熊ノ沢遺跡 象潟町大須郷字上熊ノ沢（文献112）

主に縄文時代の集落遺跡として周知されている。平成元年に発掘調査が実施され、該期の竪穴住居跡などが検出されている。銭貨はいずれも遺構外出土で7枚確認された。全て寛永通寶である。

168 横岡 象潟町横岡（文献113）

『象潟町史』によると、横岡の村上清治氏「屋敷跡から昭和34年に小判70枚、一分金80枚が発見された」との記載が見られる。『秋田貨幣史』によると、小判は天文・文政小判のようである。

169 白滝川 協和町峰吉川（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和39年「協和村峰吉川、白滝川の川欠地から天保通寶、寛永通寶等出土」とある。白滝川沿いは旧羽州街道筋にあたる。詳細は不明である。

170 小出Ⅲ遺跡 南外村小出（文献114）

縄文時代の集落、中世・近世の遺物散布地である。昭和62・63年に調査が行われ、遺構外より寛永通寶が12枚（1枚は背：波）出土した。うち11枚は台地先端部付近に比較的まとまって発見されている。

171 羽根ヶ台Ⅰ遺跡 田沢湖町小松字羽根ヶ台（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、本遺跡では土師器、須恵器と共に銭貨が得られているとされる。詳細は不明である。

172 中山遺跡 田沢湖町田沢字猫乳（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、本遺跡の種別は寺跡、遺物は「古銭、土師器片、縄文土器片、石皿」とある。詳細不明である。

173 末野遺跡 大森町上溝字末野（文献13）

縄文時代（中期）の遺跡として周知されている。『秋田県遺跡地図（県南版）』には、縄文土器、石器と共に「古銭（寛永通寶その他）」と記されている。

174 オホン清水遺跡 横手市塚堀字オホン清水（文献115）

古墳時代と平安時代の集落遺跡である。昭和58年に調査が実施され、遺構外より寛永通寶、判読不能各1枚が出土した。

175 元村 仙南村金沢西根字元村（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和32年「金沢西根元村の土蔵跡から、戊辰戦争使用のニセ小判十数枚発掘」とある。詳細は不明である。

176 七高山修験遺跡 羽後町新町字院内沢（文献116）

山岳修験に関する寺社跡及び修験道場等の遺構及び伝承の場所を包括する遺跡である。平成2年に調査が行われ、山岳修験に係わる遺構の確認はできなかったが、縄文時代中期から弥生時代にかけて頁岩の採集、1次加工を行っていた場であることが判明した。清岩寺地区Eトレンチ第2層中より寛永通寶が1枚出土した。

県内出土の銭種一覧

本集成において確認し得た出土銭貨種は、第1表のようにまとめられる。このうち、出土例の稀少な銭種について若干ふれておく。

半両は秋田市寺内周辺2例、六郷町安楽寺1例の計3例、貨泉は菅江真澄が拓影図を残した安楽寺での1例1枚のみのようである。五銖は十文字町植田など6例認められるが、多くは後

漢期の鑄造と思われ、唯一六朝期と推定できるのは、これも安楽寺での1枚のようである。

開元通寶は、実に35例（遺跡）で出土しているが、845年初鑄の紀地錢と呼ばれるものは、男鹿市豹が崎と横手市大鳥井山の2例しか確認できなかった。また篆書体の開元通寶は昭和町千刈田で1枚出土しており、これは南唐960年を初鑄とする錢貨である。

天福元寶は、男鹿市中石浜で1例出土しているようである。同錢は『中世の出土錢』には現在までのところ国内での出土例はないそうである。しかし中石浜出土錢を報じた『絹篩』によると「天福と云錢、これは晋の高祖の年号に候へ」とあり、後普938年初鑄の天福元寶と判断したものである。また後周955年初鑄の周通元寶は、鳥海町大久保と八森町林ノ沢2例のみである。

北宋錢では、熙寧重寶と崇寧通寶は、能代市浄明寺首塚で各1枚、宣和元寶は男鹿市豹が崎でのみ出土している。また紹聖通寶は、明確に同種の確認はできなかったが、紹聖元寶との判別ができない錢が存在することから表に載せている。

南宋錢では、建炎通寶が千畑町厨川谷地、湯沢市土沢、林ノ沢の3例確認され、端平元寶、嘉熙通寶も林ノ沢でのみ出土している。また明錢の大中通寶は男鹿市の北浜野と打越の2例である。朝鮮錢の常平通寶は男鹿周辺で2例確認されているが、いずれも漂着船あるいは沈没・座礁船内出土に限られる。

安南錢である大和通寶、洪順通寶、琉球錢の大世通寶はいずれも雄物川町二井山でのみ出土している錢種である。

以上の他、錢名の認められない無文錢は、鹿角市新斗米館・小枝指館・花輪館・当麻館・小平、男鹿市北浜野、秋田市秋田城・後城、雄勝町鶴沼城の9遺跡に見られる。県北鹿角地方の館出土が多いことが特徴であろう。また一括大量錢に混入している例は、北浜野のみであり、ここでは全体の21%（370枚）が無文錢で占められている。秋田城では2基の土坑墓より無文錢が検出され、うち1基（S T 635）は径18mmの無文錢6枚が納められていた。これら無文錢のうち中央の孔が円形を示す輪錢あるいは鳩目錢と称される錢は、新斗米館と当麻館の2例のようである。

また鉄錢出土の報告のあるものは、十和田湖中湖、八郎潟湖底、鹿角市小枝指館・黒土館、能代市福田、秋田城鶴ノ木の6例である。八郎潟湖底は、寛永通寶鉄錢であり、他は判読不能あるいは無文と思われる。

第1表 県内出土の銭貨種一覧

番号	銭貨名	初鑄国	初鑄年	番号	銭貨名	初鑄国	初鑄年
〔中国銭〕				42	宣和元寶	北宋	1119
1	八銖半両	前漢	B. C. 186	43	宣和通寶	北宋	1119
2	貨泉	新	A. D. 14	44	建炎通寶	南宋	1127
3	五銖	後漢	24	45	淳熙元寶	南宋	1174
4	五銖	六朝	—	46	紹熙元寶	南宋	1190
5	開元通寶	唐	621	47	慶元通寶	南宋	1195
6	乾元重寶	唐	758	48	嘉泰通寶	南宋	1201
7	開元通寶(紀)	唐	845	49	開禧通寶	南宋	1205
8	天福元寶	後晋	938	50	嘉定通寶	南宋	1208
9	周通元寶	後周	955	51	大宋元寶	南宋	1225
10	唐國通寶	南唐	959	52	紹定通寶	南宋	1228
11	開元通寶	南唐	960	53	端平元寶	南宋	1234
12	宋通元寶	北宋	960	54	嘉熙通寶	南宋	1237
13	太平通寶	北宋	976	55	淳祐元寶	南宋	1241
14	淳化元寶	北宋	990	56	皇宋元寶	南宋	1253
15	至道元寶	北宋	995	57	景定元寶	南宋	1260
16	咸平元寶	北宋	998	58	咸淳元寶	南宋	1265
17	景德元寶	北宋	1004	59	正隆元寶	金	1157
18	祥符元寶	北宋	1009	60	大定通寶	金	1178
19	祥符通寶	北宋	1009	61	至大通寶	元	1310
20	天禧通寶	北宋	1017	62	大中通寶	明	1361
21	天聖元寶	北宋	1023	63	洪武通寶	明	1368
22	明道元寶	北宋	1032	64	永樂通寶	明	1408
23	景祐元寶	北宋	1034	65	宣德通寶	明	1433
24	皇宋通寶	北宋	1038	〔朝鮮銭〕			
25	至和元寶	北宋	1054	66	朝鮮通寶	朝鮮	1423
26	至和通寶	北宋	1054	67	常平通寶	朝鮮	1678
27	嘉祐元寶	北宋	1056	〔安南銭〕			
28	嘉祐通寶	北宋	1056	68	太平興寶?	丁	970
29	治平元寶	北宋	1064	69	大和通寶	後黎	1443
30	治平通寶	北宋	1064	70	洪順通寶	後黎	1509
31	熙寧元寶	北宋	1068	〔琉球銭〕			
32	熙寧重寶	北宋	1071	71	大世通寶	琉球	1454
33	元豐通寶	北宋	1078	〔日本銭〕			
34	元祐通寶	北宋	1086	72	和同開珎	日本	708
35	紹聖元寶	北宋	1094	73	萬年通寶	日本	760
36	紹聖通寶	北宋	1094	74	隆平永寶	日本	796
37	元符通寶	北宋	1098	75	富壽神寶	日本	818
38	聖宋元寶	北宋	1101	76	慶長一分金	日本	1601
39	崇寧通寶	北宋	1102	77	寛永通寶	日本	1636
40	大觀通寶	北宋	1107	78	天保通寶	日本	1835
41	政和通寶	北宋	1111	79	文久永寶	日本	1863

加護山出土銭は除く、(紀)は紀地銭を表す

まとめ

秋田県内において銭貨の出土した遺跡（地区）は、176箇所のにのぼる。このうち発掘調査による検出例は69であり、残り107箇所は工事等により偶然発見されたことになる。さらに小稿で【一括大量出土地】としたものは57例あり、そのいずれもが偶然掘り出されているのである。近年著しく発掘調査事例が増加しているが、その調査中に発見された例はない。前項では昭和（戦後）以降について、出土地を一括の有無や種別から分類の上記載していたが、ここではそれ以前の資料も含め整理しておく。

A：一括大量出土銭は、文献等の記載のみで現存しない（しないと思われる）場合が多いが、57例中、何らかの容器に入れられていたものは23例あるようである。最も多いのが甕あるいは壺の13例、次いで曲物6例、その他に木箱、カマス、鉢形の容器、漆塗りの重鉢がある。容器が確認できなかった場合でも裸のまま埋納するとは考えられないので、カマスや布袋に入れていたと推定される。埋納銭種は、中世渡来銭のみである例が圧倒的であるが、鳥海町大久保では和同開珎が、男鹿市鹿の沢では寛永通寶が混在しており、大潟村八郎潟湖底は寛永通寶が主である。

B：出土地の種別に着目すれば、【中世の館跡・集落跡】関係の出土例が多い。50数例程確認できる。次いで【近世の館跡・塚・神社跡等】12例、【中世の墓・塚】10例と続く。近世の塚では5遺跡6基より寛永通寶が得られているが、その出土状態には差異がある。すなわち銭貨が塚の墳丘内部から出土する場合と、塚表面から採集される場合とである。明らかに前者は構築にあたって銭貨を埋納あるいは封入させたものであり、比内町中野、田代町上岩瀬、秋田市一ツ森の3基が該当する。他方後者は構築後に供えられたようであり、大館市餌釣、横手市富ヶ沢の2遺跡3基が当てはまる。塚の構築目的などについては、民俗例等より検討する必要があると思われるが、ここでは言及し得ない。一方中世塚出土の銭貨は、明確な例では能代市浄明寺首塚、峰浜村内林、仁賀保町丁刃森、羽後町貝沢拾三本塚、湯沢市松岡経塚の5遺跡であるが、後三者は経筒あるいは経石等を共伴する経塚出土である点に特徴がある。

墓出土の銭貨は、六道銭と称される副葬銭として扱われている。渡来銭を副葬する中世墓は4遺跡22基で確認されているが、寛永通寶等の近世日本銭を副葬する近世墓の検出は現段階ではない。なお、寛永通寶が遺構内より出土した例は次の4遺跡にある。鹿角市花輪館では竪穴床面、秋田市久保田城と秋田城鶴ノ木では土坑内、雄勝町鶴沼城では溝跡内である。

また特異な事例では、海岸に打ち上げられた銭貨を採取した例が江戸時代の文献より5例確認できる。船舶の座礁・沈没等に伴うものであろう。事実安永7年（1778）には、朝鮮国の漁船と思われる船が現在の男鹿市船越に漂着しており、船内に常平通寶等が遺棄されていたことも記録に残っている。沈没船と言えば、大潟村八郎潟湖底出土銭も潟航行の船の積み荷であっ

た可能性が高い。一方湖底出土銭は、十和田湖中湖でも引き上げられている。この場合は、信仰による銭銭の集積と推定されている。また二ツ井町加護山は鑄造地での出土として特筆できる。

おわりに

秋田県における出土銭貨の集成作業を通して、その多くの事例の存在と共に、出土後に所在不明となったり、未精査の資料も少なからず認められることも判明した。特に非発掘調査資料、一括大量銭は、被害者となる場合が多い。出土銭貨は古物ではなく遺物・文化財である。その認識を新たに、出土予測不能な資料に対しても考古学的に検証できるように、何らかの策を講じることが考古学に携わる者に求められているように思える。

起稿にあたり、数多くの文献を引用させていただいた。なかに誤認・誤記はない、とは断言できない。お気づきの点がありましたらお知らせください。もちろん出土銭の情報もよろしく願います。

最後になりましたが、本集成を行うにあたり、県内各地の教育委員会・公民館等の関係者を始め、次の方々の協力を得ました。記して御礼申し上げます。

藤井安正、板橋範芳、近藤佳成、和泉昭一、岡田辰雄、松田純一、古内龍夫、武田孝義、小林喜兵、山崎和夫、村井和雄、大原正夫、石川尚三、磯村朝次郎、船木義勝、小松正夫、日野久、田口政一、佐藤勇悦、長谷川潤一、斎藤俊明、遠田喜一、池田史郎、赤川祐一、高橋建、伊藤攻、相馬律子、磯村亨、大沢貢悦、藤澤昌、小西宏彦、澤谷敬、佐野浩子、土肥稔、鈴木俊男、柴田陽一郎（敬称略、順不同）

引用文献

- 1 今村義孝監修『新秋田叢書』第4巻 1971（昭和46年）所収
- 2 - ① 人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968（昭和43年）所収
- ② 深沢多市編『秋田叢書』第2巻 1929（昭和4年）所収
- ③ 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第7巻 1978（昭和53年）所収
- ④ 今村義孝監修『新秋田叢書』第7巻 1971（昭和46年）所収
- 3 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第5巻 1975（昭和50年）所収
- 4 寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947（昭和22年）引用は1978年発行の復刻版参照。
- 5 狩野徳蔵『雄鹿名勝誌』五版 1914（大正3年）
- 6 佐藤清一郎『秋田貨幣史』1972（昭和47年）
- 7 - ① 真崎勇助（収集）『山本郡檜山浄明寺掘出品之書上』（大館市立中央図書館蔵）。これらの遺物は、真崎勇助が著した『酔月堂随筆』（巻之二）の「山ノ崩ヨリ出ル鬘腰井器物」によると、

樽と思われる丸桶（内面朱塗り、外面黒塗り）に入っていたようである。更に銭貨は2本の銀針金（尋常の火箸程の太さ）にそれぞれ6枚と3枚に分けて通されていたとも記している。

- －② 今村義孝監修『新秋田叢書』第15巻 1972（昭和47年）所収
- 8 今村義孝監修『新秋田叢書』第3巻 1971（昭和46年）所収
- 9 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）
- 10－①② 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第4巻 1973（昭和48年）所収
- 11 文献10、佐藤久治『秋田の神々と神社』1981（昭和56年）
- 12 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第6巻 1976（昭和51年）所収
- 13 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）
- 14 石川理紀之助『古泉 川上の巻』1908（明治41年）
- 15 五城目町『五城目町史』1975（昭和50年）
- 16 石川理紀之助『豹が崎』1907（明治40年）
- 17 金足西尋常高等小学校『金足村郷土誌』第1輯 1934（昭和9年）
- 18 鳥海町『鳥海町史』1985（昭和60年）
- 19 天王町役場『天王町誌資料』1968（昭和43年）
- 20 稲川町教育委員会『稲川町史資料篇』第三集 1967（昭和42年）
- 21 石川理紀之助『ひろねのいづみ』1915（大正4年）
- 22 磯村朝次郎「一向遺跡」『船越誌－その自然と歴史－』1978（昭和53年）
- 23 栗田茂治『南秋田郡史』1951（昭和26年）より引用
- 24 ニッ井町『町史資料 加護山製錬所』1995（平成7年）
- 25 千畑町「古銭発掘由来記」『千畑町郷土誌』1986（昭和61年）
- 26 湯沢市教育委員会「埋蔵古銭貨」『湯沢市史』1965（昭和40年）
- 27 磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981（昭和56年）
- 28 佐々木正雄「中国の古銭」『八森郷土誌資料』第27号 1987（昭和62年）
- 29 河辺町教育委員会『河辺町の遺跡』1987（昭和62年）
- 30 笹尾哲雄『大悲寺七百年史』1976（昭和51年）
- 31 秋田県教育委員会「内林遺跡」『秋田県遺跡分布調査報告書』1979（昭和54年）「秋田県遺跡カード」とは秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図』作成の元となった台帳を指す。
- 32 栗沢光男・高橋忠彦・熊谷太郎「秋田県内の珠洲系陶器資料」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 1986（昭和61年）
- 33 佐々木正雄「中国古銭の出土」『八森町誌』1988（昭和63年）
- 34 武田孝義「上平張遺跡」『能代市史』考古編 1995（平成7年）
- 35 ニッ井町町史編さん委員会「大林の古銭」『ニッ井町史』1977（昭和52年）
- 36 井川町「今戸出土の中国古銭」『井川町史』1986（昭和61年）
- 37 佐々木民秀「豊岩発掘銭を観て」『秋田貨幣ニュース』第18号 1977（昭和52年）

- 38 『秋田民報』昭和45年9月12日付けの記事
- 39 雄物川町役場『雄物川町郷土史』1980（昭和55年）
- 40 十文字町『十文字町史』1996（平成8年）
- 41 上野昭夫「八郎潟の沈船」『秋田魁新報』昭和45年6月9・10日付（夕刊）、上野昭夫「続・八郎潟の古銭」『秋田魁新報』昭和45年12月7・8日付（夕刊）。至元通寶については、調査者である上野氏が至元通寶＝宋銭と記しているが、同名の宋銭はなく、元朝1285年に初鑄の至元通寶であるのか、別の銭を指しているのかは不明である。なお、『中世の出土銭』によると至元通寶は国内での検出例はないそうである。
- 42 秋田貨幣研究会『秋田貨幣ニュース』第5号 1976（昭和51年）
- 43 『仙東新聞』昭和36年7月15日付の記事
- 44 鹿角市教育委員会『鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』1980（昭和55年）
鹿角市教育委員会『鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書』1981（昭和56年）
- 45 秋田市教育委員会「下堤C遺跡」『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 46 横手市教育委員会『大鳥井山Ⅰ』1978（昭和53年）
- 47 秋田県立博物館『秋田県立博物館 総合案内』1987（昭和62年）には、出土銭の一部と容器の写真が掲載されている。
佐々木民秀「横手一分金その後」『秋田貨幣ニュース』第12号 1977（昭和52年）、三浦畑四郎「横手埋蔵一分金評価委員会に出席して」『秋田貨幣ニュース』第15号 1977（昭和52年）
- 48 秋田県教育委員会「湯瀬館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』1981（昭和56年）
- 49 秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982（昭和57年）
- 50 鹿角市教育委員会『長牛城跡発掘調査報告書』1981（昭和56年）
- 51 秋田県教育委員会「妻の神Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅠ』1984（昭和59年）
- 52 秋田県教育委員会「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅶ』1984（昭和59年）
- 53 秋田県教育委員会「高瀬館遺跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘地区報告書Ⅱ』1987（昭和62年）
- 54-① 「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』1958（昭和33年）
-② 鹿角市教育委員会『小枝指館跡発掘調査報告書』1992（平成4年）
- 55 鹿角市教育委員会『地羅野館跡発掘調査報告書』1993（平成5年）
- 56-① 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘・下沢田遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59年）
-② 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘調査報告書（2）』1988（昭和63年）
- 57 鹿角市教育委員会『花輪古館跡発掘調査報告書』1994（平成6年）
- 58 鹿角市教育委員会『小平遺跡』1979（昭和54年）
- 59 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書』1996（平成8年）
- 60 鹿角市教育委員会『当麻館跡発掘調査報告書』1989（平成元年）

- 61 大館市史編さん委員会『大館市片山館コ発掘調査報告書第1次』1973（昭和53年）
- 62 大館市教育委員会『餌釣館跡発掘調査報告書』1996（平成8年）刊行予定
- 63 大館市史編さん委員会「前田館」『大館市史』第1巻 1979（昭和54年）
- 64 大館市史編さん委員会『谷地中「館」・中野円墳状遺構発掘調査報告書』1973（昭和53年）
比内町教育委員会『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 65 比内町教育委員会『大日堂前遺跡発掘調査報告書』1982（昭和57年）
- 66 比内町教育委員会『真館緊急調査報告書』1973（昭和48年）
- 67 秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』1990（平成2年）
- 68 峰浜村教育委員会「蝦夷館遺跡」『峰浜村の文化財』1975（昭和50年）
- 69 能代市教育委員会『金山館発掘調査概報』1985（昭和60年）
能代市教育委員会『金山館発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 70 秋田県教育委員会「館の上館遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』1994（平成6年）
- 71 磯村朝次郎「船越一向遺跡調査概報－現存井戸跡を中心として－」『男鹿市文化財調査報告』
No. 1 1965（昭和40年）
- 72 文化財保護委員会『秋田城跡第三次調査概要』1962（昭和37年）
- 73 秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』1979（昭和54年）
- 74 秋田市教育委員会『秋田山下夕野遺跡』1979（昭和54年）
- 75 秋田市教育委員会「岩城館跡」『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』1989（平成元年）
- 76 西目町教育委員会『浜館遺跡調査報告書』1975（昭和50年）
- 77 秋田県教育委員会『金沢柵発掘調査概報』1967（昭和42年）
- 78 秋田県教育委員会「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ』1990（平成2年）
- 79 平鹿町『平鹿町史』1984（昭和59年）
- 80 稲川町教育委員会『稲庭城跡発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 81 秋田県教育委員会『鶴沼城跡発掘調査報告書』1980（昭和55年） 錢名は報告書の記述と一部異なるが、筆者が実見し判読した結果を載せている。
- 82 秋田県教育委員会「福田遺跡」『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1989（平成元年）
- 83 磯村朝次郎「脇本飯森家屋埋没遺址調査概報」『秋田考古学』第18号 1961（昭和36年）
- 84 秋田県教育委員会『片符沢遺跡Ⅰ発掘調査報告書』1980（昭和55年）
- 85 秋田県教育委員会『カウヤ遺跡発掘調査報告書』1985（昭和60年）
秋田県教育委員会『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 86 西木村郷土史編纂会『西木村郷土史資料』西明寺篇中巻 1968（昭和43年）
- 87 羽後町教育委員会「羽後病院敷地遺跡」『福島遺跡ほか発掘調査報告書』1994（平成6年）
- 88 秋田県教育委員会「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅸ』1984（昭和59年）

- 89-① 秋田市教育委員会『昭和48年度秋田城跡発掘調査概報』1974（昭和49年）
- ② 秋田市教育委員会『昭和54年度秋田城跡発掘調査概報』1980（昭和55年）
- ③ 秋田市教育委員会『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』1983（昭和58年）
- ④ 秋田市教育委員会『昭和60年度秋田城跡発掘調査概報』1986（昭和61年）
- ⑤ 秋田市教育委員会『平成4年度秋田城跡発掘調査概報』1993（平成5年）
- ⑥ 秋田市教育委員会『昭和55年度秋田城跡発掘調査概報』1981（昭和56年）
- 90 秋田県教育委員会「待入Ⅲ遺跡」『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
1992（平成4年）
- 91-① 奈良修介「羽後町三輪十三本塚十号墳調査報告」『秋田考古学』第16号 1960（昭和35年）
- ② 畠山章弘「十三本塚出土の切遣い金と宋銭」『秋田貨幣ニュース』第20号 1977（昭和52年）
- 92 秋田県『秋田県史考古編』1960（昭和35年）
 山下孫継『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』湯沢市教育委員会 1961（昭和36年）
- 93 秋田市教育委員会「湯ノ沢F遺跡」『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984（昭和59年）
- 94 秋田県立博物館『所蔵資料目録（考古）』1983（昭和58年）
- 95-① 秋田市教育委員会『昭和52年度秋田城跡発掘調査概報』1978（昭和53年）
- ② 文献 89-⑥
- ③ 秋田市教育委員会『平成2年度秋田城跡発掘調査概報』1991（平成3年）
- ④ 秋田市教育委員会『平成5年度秋田城跡発掘調査概報』1994（平成6年）、小松正夫「秋田城跡出土土衣壺の埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』創刊号 1994（平成6年）、小松正夫「秋田城跡出土土衣壺の新知見と埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』第4号 1995（平成7年）、『秋田魁新報』平成7年12月7日付け記事
- ⑤ 秋田市教育委員会『平成6年度秋田城跡発掘調査概報』1995（平成7年）、西谷隆「秋田城跡出土の「和同開珎銀銭」について」『出土銭貨』第2号 1994（平成6年）
- 96 鹿角市教育委員会『柏崎館跡発掘調査報告書』1989（平成元年）
- 97 大館市史編さん委員会『秋田県北秋田郡比内町谷地中「館」・中野円墳状遺構発掘調査報告書』1973（昭和48年）
- 98 秋田考古学協会『秋田市金照寺山一ツ森遺跡発掘調査報告書』1976（昭和51年）
- 99 秋田県教育委員会「富ヶ沢4号塚」『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1992（平成4年）
- 100 秋田市教育委員会『久保田城跡－本丸御隅櫓発掘調査報告書－』1989（平成元年）
- 101-① 秋田県教育委員会『払田柵跡－第12次補足・第13次～22次発掘調査概要－』1979（昭和54年）
- ② 秋田県教育委員会『払田柵跡－第38～45次発掘調査概要－』1982（昭和57年）
- 102 羽後町教育委員会「柏原古墳群」『福島遺跡ほか発掘調査報告書』1993（平成5年）

- 103 秋田県教育委員会「北の林Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』1982（昭和57年）
- 104 大館市教育委員会『大館市玉林寺跡発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 105 大館市教育委員会『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』1990（平成2年）
- 106 秋田県教育委員会「萱刈沢Ⅱ遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1993（平成5年）
- 107 男鹿市教育委員会『延命寺台遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59年）
- 108 三浦鉄郎『新編・秋田の地名』1987（昭和62年）
- 109 秋田県教育委員会『蒲沼遺跡発掘調査報告書』1982（昭和57年）
- 110 秋田県教育委員会「片野Ⅰ遺跡」『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1996（平成8年）
- 111-① 文献89-⑥と同、-②文献89-③と同、
-③ 秋田市教育委員会『昭和62年度秋田城跡発掘調査概報』1988（昭和63年）
- 112 秋田県教育委員会「上熊ノ沢遺跡」『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1991（平成3年）
- 113 象潟町教育委員会『象潟町史』1973（昭和48年）
- 114 秋田県教育委員会「小出Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』1991（平成3年）
- 115 横手市教育委員会『オホン清水～第3次遺跡発掘調査報告書～』1984（昭和59年）
- 116 羽後町教育委員会『七高山修験遺跡詳細分布調査報告書』1991（平成3年）